

東浩紀『存在論的・郵便的』の解釈と想像性からの批判的考察
—東に欠如している視座は何か—

西川知希

〈目次〉

第 1 章	はじめに	3
第 2 章	『存在論的・郵便的』	3
	2.1 エクリチュールとシニフィアン	3
	2.2 脱構築	4
	2.3 郵便＝誤配システム	6
第 3 章	「想像界と動物的回路」	8
	3.1 ハイデガー分析	8
	3.2 ラカン分析	9
	3.3 『存在論的・郵便的』との関係	10
第 4 章	『動物化するポストモダン』	10
	4.1 3つのモデル	10
	4.2 深層と表層	13
第 5 章	ドゥルーズ	13
	5.1 ドゥルーズとつなぐ	13
	5.2 東とつなぐ	15
第 6 章	東を超えて	16
	6.1 動物化の意味	16
	6.2 イメージの次元	17
	6.3 深層にあるもの	18
第 7 章	想像性という視座	19
	7.1 想像性によるモデル化	20
	7.2 象徴性によるモデル化	24
	7.3 鏡像段階	25
	7.4 自閉症な性質を持つ形式とラカン	28
	7.5 男性的形式と女性的形式の分析	29
	7.6 剰余について	33
第 8 章	オタク論	33

8.1	東のオタク論批判	33
8.2	自閉症的な性質を持つ形式の次元	34
8.3	女性的形式の次元	35
8.4	男性的形式の次元	36
8.5	キャラクター	37
8.6	都市とオタク	38
第9章	最後に	39

[キーワード] 東浩紀、エクリチュール、萌え要素、ラカン、〈男性〉、〈女性〉、〈自閉症〉

第1章 はじめに

本論文では、東浩紀の主著ともいえる『存在論的・郵便的』と『動物化するポストモダン』を軸に、東浩紀は何を論じ、そして、何を論じ切れていないかということ明らかにすることを目的とする。東は『存在論的・郵便的』で郵便＝誤配モデルをデリダの解釈を通して構築し、『動物化するポストモダン』でデータベースモデルを構築する。前者では哲学的な視点から人間の精神構造を分析することを主軸に置いているのに対して、後者はサブカルチャーという視点から、ポストモダン社会の構造を分析することを主軸に置いている。両者に論述のスタイルの相違は存在しているが、同じ問題を別の視点から扱っていると考えられるので、本論文ではスタイルの相違を乗り越え、両者を包括する議論を展開していく。

また、本論文で主軸に置かれるのは、人間の心的構造であり、そのために、私は東以外の現代思想家にも積極的にアプローチし東の理論を再構築することを第二の目的とする。その為、男性的形式や女性的形式、自閉症的性質を持つ形式といったモデルを用いるが、これは実際の男性、女性、自閉症に対応しているわけではなく、本稿における想像性や象徴性などの心的構造におけるモデル化を示すタームに過ぎない。そして、実際の個人はそのモデルの配分により分析しようとする。しかし、現実における人間関係を想起してしまう場合は人間1、人間2、人間3というように読み替えても差し支えない。

第2章 『存在論的・郵便的』

2.1 エクリチュールとシニフィアン

オースティンの言語行為論は言明をコンスタンティブなもの（事実）とパフォーマティブなもの（行為）に分ける。前者は事実かどうかを単に述べるオブジェクトレベルの分析であるのに対し、後者は、言明が話されることを通じて世界に何か働きかけるメタレベルの分析である。この二者はその場のコンテクストにより区別されると考えられている。東はデリダを持ち出し、この言語行為論を批判する。全ての記号は引用することができる。つまり、他のコンテクストに移植することができるので、あらゆる言明はコンスタンティブとパフォーマティブの両方の次元に属することになる。東は「この牛は危険である」という張り紙の例を挙げている。この言明は特定の牛に対するコンスタンティブな言明として解釈することもできるし、危険だからこの牛に近づくなというパフォーマティブな言明としても解釈することができる。東はこの現象について、単一のエクリチュールが複数のコンテクストを移動することで、「散種的複数性」が事後的に見出されると述べており、もはやコンスタンティブとパフォーマティブの二項対立は成立しない。もう少し詳しく述べると、複数性がもともとエクリチュールに備わっているわけではなく、エクリチュールは単一的である。エクリチュールが平行的に存在する他のコンテクストに移植されることで、そこに散種的複数性があったのだということが事後的に見出されるものである。

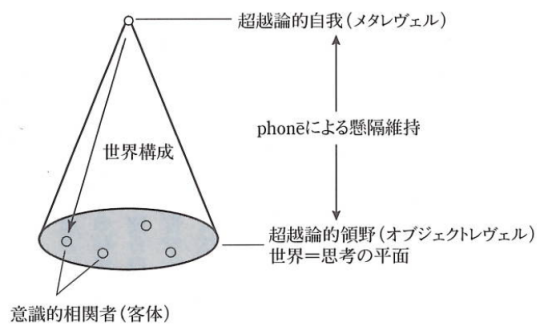
また、東はシニフィアンとエクリチュールを分ける。エクリチュールは他のコンテクスト

に移植されたとしても、エクリチュールとしては「同じ」であるが、シニフィアンとしては「同一」ではない。この区別は本稿を貫く論点となる。

2.2 脱構築

本節で述べる脱構築は必ずしもデリダの用いた脱構築に対応しているわけではなく、東が構想する三つの脱構築についての叙述を追う。東は論理的脱構築、存在論的脱構築、郵便的脱構築と名付ける。論理的脱構築とはオブジェクトレベルとメタレベルは決定不可能であるとする理論である。これが、脱構築の第一段階である。第二段階として存在論的脱構築と郵便的脱構築がある。東は、ハイデガー、ラカン、ジジエクは存在論的脱構築を行うことで、否定神学システムに陥っていると批判する。一方、東は郵便的脱構築を行うことで、郵便＝誤配システムを構築するのである。

論理的脱構築は「形而上学システム」を解体する。東の言う形而上学システムとは、一言でいうと、全てのシニフィアンにそれぞれ一対一でシニフィエが対応する双数的なモデルである。(図1参照)



(図1) 形而上学システム 東(1998)より

東はここで固有名について論ずる。東はラッセルを単純な記述主義とみなす。記述主義においては、固有名は言語体系の内部に存在することになる。それに対し、クリプキは反記述主義を展開する。例えば「アリストテレス」という固有名は、「プラトンの弟子」「『自然学』の著者」「アレクサンダー大王の師」等の諸性質(確定記述)の束から構成される。しかし、我々にとって「アリストテレスはアレクサンダー大王を教えてはいなかった」と仮定することは可能であるが、固有名が確定記述の束であるならば「アレクサンダー大王の師はアレクサンダー大王を教えていなかった」という矛盾に陥り、語は自壊へ向かう。しかし、我々の日常的な感覚からして「アリストテレス」という語を維持しつつ「アリストテレス(プラトンの弟子)はプラトンの弟子でなかった」と問うことは可能である。つまり、固有名には確定記述(シニフィエ)に還元されないクリプキの固定指示子(東の剰余 plus)が宿っていると考えられるのである。この作業のことを東は論理的脱構築という。なお、本稿の後半では剰余は固定指示子という実体ではなく、人間の心的構造の理論から説明されることを示す。

この剰余をどのように解釈するかというところに、存在論的脱構築と郵便的脱構築の岐路がある。まず、存在論的脱構築について述べる。ラカン派の用語を使えば、語の剰余は対象 a ということができる。つまり、確定記述という象徴秩序に回収しきれない剰余が語には存在する。東にとって剰余は語のコンスタンティブな解釈とパフォーマンスな解釈の決定不

可能性の間にある。この決定不可能性から象徴界には根源的な欠如が存在していると考えられる。そして、象徴秩序から漏れでた部分が現実界を構成し、その痕跡が対象 a である。象徴界におけるこの根源的な欠如こそが固有名の剰余を保証する。したがって、象徴界の根源的な欠如は全ての語の根源的なシニフィアンである。したがって、このシニフィエを持たない、シニフィアンを以下では超越論的シニフィアンと呼称する。この根源的な欠如を埋めるためにそこからシニフィアンが連鎖していく。つまり、シニフィアンはシニフィアンにより無限に言い換えられていく。しかし、根源的な欠如を埋めることはできないが、超越論的シニフィアンの超越論性により欠如（システムの不完全性）は隠蔽される。つまり、否定神学はシステムの全体性を持たないということで全体性を確証しており、否定的にシステムの全体性を語ることになる。

東は、自身の理論を構築するにあたって、手紙の隠喩を用いる。形而上学システムにおいては、手紙は宛先に対して常に一对一の関係で送付される。否定神学システムの場合、超越論的シニフィアンはその宛先のシニフィエを持たないのだから、手紙は何処にも届かない。しかし、メタ的にみると、それは何処にも届かないという場所に必ず届くのである。このシステムにおいて、手紙が現前化する時、実際は様々な伝達経路をたどってきたものであるにもかかわらず、象徴界全体のシステムとして解釈されるため、伝達経路自体は抹消される。東は、否定神学システムが抹消する伝達経路を重視するような自身の郵便＝誤配システムを構築している。

ここまでの理論を踏まえ、東の構想する郵便＝誤配システムを考察していく。手紙は常に宛先に届かないことがありうるということに対し、確率論的に曝されている。つまり、単数的な超越論的シニフィアンを想定するのではなく、シニフィアンが届かないかもしれない、あるいは宛先とは異なるところに届くという誤配可能性即ち複数性に東は注目する。さらに、幽霊という概念をデリダに則り導入する。幽霊とは平たく言うと「かもしれない」という次元に存在する条件法過去であり我々に常に再来するものである。

また、東は「不可能なもの」についても言及する。「不可能なもの」とは、我々が決して触れることのできないものである。つまり、我々の言及できないものであり、象徴化作用から漏れ出る剰余のことである。「不可能なもの」を語る際に、否定神学によるとシステムの全体というものに超越論的な視点から否定的に言及する必要があったが、郵便モデルによると、その必要はない。「不可能なもの」は行方不明の郵便物としてイメージされるのだ。郵便モデルにおいて、誤配が生じるのは、郵便制度全体の不具合の為ではなくシニフィアンの送付の脆弱性の為である。郵便モデルでは、剰余をシニフィアンが主体の前に届けられるまでの伝達経路の誤配可能性に求めている。つまり、伝達経路の「かもしれなかった」という条件法過去次元が、複数の幽霊を生み出し、固有名に散種を与えるのだ。否定神学が伝達経路を抹消し、象徴界という現前しているものにしか注目しないのに対して、郵便＝誤配システムは、送付の一回一回の伝達経路に注目する。郵便＝誤配システムは一回一回その時になってみないとわからないという偶然性を孕み、そして、その事象は必然ではなく、そうではなかったかもしれない可能性に曝されていると考えるシステムである。

ここで、一度否定神学システムと郵便＝誤配システムについて、まとめておく。否定神学

システムは「不可能なもの」を超越論的シニフィアンという単数的なものから否定的に言及する。したがって、手紙は必ず届く。一方、郵便＝誤配システムにおいては、複数的な世界を構築する。それは、二章の初めで言及した単数であるエクリチュールは、複数の文脈に移植されることで散種複数が事後的に見出されるということと同じ意味である。単数的な否定神学において、脱構築の彼方に超越論的な審級があるが、超越論的審級はもはや脱構築不可能な真理としての役目を持つ。一方、郵便＝誤配システムにおいて脱構築は永遠に終わりを迎えない。

2.3 郵便＝誤配システム

東は郵便モデルを図示するにあたり、フロイトを用い意識 Bw/無意識 Ubw の区別、物表象 Dingvorstellung/語表象 Wortvorstellung の区別を導入する。物表象とは論理形式(メタレベル)を指し、語表象は名詞(オブジェクトレベル)を指す。意識には物表象と語表象の両方が備わるが、無意識(夢)には語表象のみしかない。したがって、論理形式が無意識の次元へ向かう時、必然的に論理形式は名詞化する。つまり、判断は消え失せ、判断したという名詞になる。即ち、無意識の次元では、肯定/否定の二項対立自体が否定される。

ラカン派精神分析によると、象徴界から排除された超越論的シニフィアンは現実界として回帰する。しかし、このシニフィアンの単一性は無意識(クラインの管)では保持されない。語表象の次元では、超越論性を剥奪され、視覚的なエクリチュールとしてのみ処理されるからだ。

東は「分析者と被分析者とのあいだで欲望が転移しあう(転移/逆転移)このレベルにおいては、分析は決して終わることがなく、そこで両者のエスは、互いが互いを照らしあう鏡像関係に巻き込まれる」¹と述べる。この終わりなき関係のなかで、要請されている転移的技法を「古名」paléonymie の戦略と名付ける。この戦略は既存の二項対立の外部を示すために二項対立の内部の古い名を維持する戦略であると東は述べる。具体的な手順としては、第一段階で、確定記述の「切り抜き」が行われ、第二段階で、切り抜かれた後に残った「名」に確定記述の接木と拡張が行われる。つまり、エクリチュールからシニフィアンの同一性を除去し、同じエクリチュールに異なる新たな同一性を付与する。エクリチュールとしての名は同じ場所に留まり続けるが、その語の持つ確定記述の束は変化し続ける。この確定記述の束における同一性の次元と、エクリチュールの同じものの性の次元におけるズレこそが、語に剰余 plus＝エクリチュールを与えると東は主張する。

古名の戦略と同じことを、東は丸山圭三郎を参照し、風船の比喩を用いても説明している。箱の中に風船がいくつかがぎゅうぎゅうに詰まっている状況を想像してほしい。それぞれの風船は圧力をかけ合いながら存在している。その中の一つの風船の圧力が強くなった時、他の風船は圧迫され縮み、箱の中の各風船の占める場所は変化する。また、一つの風船が割れた場合、周りの風船が割れた風船があった場所に侵入しその場所は埋められる。ここで、箱の中の位相に対応しているのがエクリチュールで風船の占める場所がシニフィアンに対応している。風船の状況は常に変化し続けており、箱の中の位相と風船の占める場所はたえず変化し続ける。この変化によるズレが、エクリチュールとシニフィアンの間にあるズレであり、

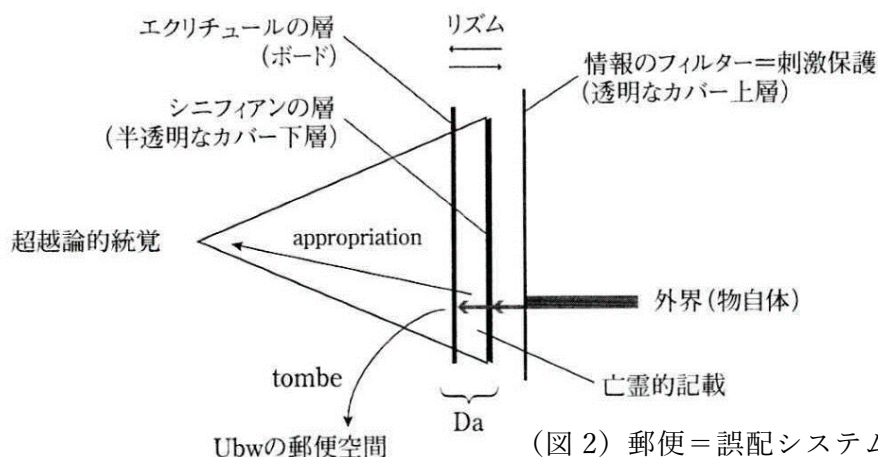
そこから剰余が生まれると理解される。

フロイトは、人間には「他者の意識的表明を意識を介さずに理解する」²つまり、無意識と無意識を、意識を媒介せずに繋ぐ能力が存在していると考えている。換言すると分析者と被分析者の間で、「一方が発したエクリチュールがそのまま、つまりどちらの意識によってもシニフィアンとして同定されず、直接に他方のエクリチュールと呼応し合う可能性」³があるのだ。そして、この無意識における転移の作用こそが、郵便空間を作り上げるものであると東は考える。

東の郵便＝誤配システムはハイデガーの否定神学システムとの対比の上にある。現存在は、世界を産出するものである（メタレベル）と同時に、世界の一存在者である（オブジェクトレベル）。そして、現存在はその二層を峻別すると同時に統一するものとして描かれている。この現存在のあり方をハイデガーは二枚襷と表現しており、否定神学システムによると語の剰余はこの二枚襷に由来すると考えられる。

一方、東の解釈するデリダの世界では、超越論性に基づく自己言及構造ではなく、言葉自体が持つ、シニフィアンとエクリチュールの裏打ち構造と、その転移化により、言葉の持つ剰余が説明される。古名の原理として説明したとおり、シニフィアンとエクリチュールはたえずズレ（差延）を孕む。そのズレから剰余は生じるのだ。意識下では、形而上学システムや否定神学システムのように表象するものと表象されるものとの距離がゼロに限りなく近づいており、剰余はないと思いつく。一方、無意識では、語表象が消え失せ、表象されるものとするものとの間は再び離れると述べる。このゼロに近づいたり離れたりする不連続的な空間が「亡霊」の潜む空間である。デリダにとってエクリチュールとは、シニフィアンに還元されない、言い換えると象徴化作用に還元されない剰余のリズムを維持しつつ主体の中に導き入れる転移として解釈される。以上から東の郵便＝誤配システムは二つの条件を持つことが明らかになった。つまり、エクリチュールとシニフィアンの二重構造と、自己と他者との無意識の連結である。このことについて東は次のように述べる。（図2参照）

無意識が意識を介さずエクリチュールの送受信をできるということは、Da＝世界のなかにエクリチュール（物表象）としてのみ記載される情報、つまりオリジナルなしのシミュラクル、いわば純粋な幽霊が存在することを意味するからだ。その情報は外界から到来し、シニフィアンとして固有名化＝意識下されることのないまま Ubw へと崩落している。⁴



(図2) 郵便=誤配システム 東 (1998) より

以上のように、東は自身の郵便=誤配システムにおいて、伝達経路の誤配可能性から、フロイトの概念系を経由することで独自のモデルを構築した。ここで、一つ東の理論に課題を提出する。即ち、東はエクリチュールとシニフィアンの二重性とその両者のリズムにより剰余が生み出されると考えるが、他者とのエクリチュールによるコミュニケーションについての理論は非現実であると言わざるを得ない。東自身の理論では何故転移が生じるのか、即ち自己と他者のエクリチュールが何故どのようにして繋がるのかは説明していない。東は、この大きな問題を『存在論的・郵便的』ではすっ飛ばしてしまっている。東は、フロイトの理論と臨床を紹介しただけでエクリチュールの連結を帰結している。本稿では、他者との連結のメカニズムと、連結における誤配可能性について述べる。

第3章 「想像界と動物的回路」

「想像界と動物的回路」⁵では、東はハイデガー及びラカンを批判し、デリダ的郵便=誤配システムを再提起する。ここでは、『存在論的・郵便的』で位置づけが曖昧なままになっていた想像界、即ちイメージの領野についての位置づけを行っている。本稿の目的の一つある、東の想像性についての批判は後にここにも向けられることになる。

3.1 ハイデガー分析

まずは、東のハイデガー、ラカン批判を読み取る。ここで東はハイデガーの有名なテーゼである「動物は世界が貧しい」というものを取り上げる。ハイデガーによると、非人間はオブジェクトレベルに留まるのに対し、人間はメタレベルとオブジェクトレベルの二重性をそなえた現存在として存在しているのであった。つまり、動物は世界のない物体と世界を産出する人間の間位置する。しかし、この位置づけによると、人間と物体はグラデーションを成すものとして捉えられてしまい、其々の形式は崩壊すると東は述べる。ハイデガーによると現存在は自身の存在を世界の了解に基づき様々な可能性に投企する。そして、了解が行

う投企の中で、了解自体を発達させるものを解意 *Auslegung* と言う。現存在は既に了解されている世界に対して配慮的に携わることで、その世界を解意する。つまり、解意とは自覚的に了解することであり、現存在が持つ二重性のことである。具体的には「……のためにあるのか」と問いかけ、「それは、……するためにある」と答える用具的存在者 *Zuhandensein* の形をとる。このような形で開示されたものは《として》*als* の構造を持つのである⁶。また、ハイデガーによると、現存在はどのように世界を知覚したとしても、それは既に了解的＝解意的となると述べる。つまり、知覚において、まず初めに客体的存在者 *Vorhandensein* が経験され、その後、《として》構造が現れるというのではなく、実際は先に《として》構造があり、事後的に客体的存在者がそこにあったという意味で出会うのである⁷。この構造をハイデガーは《先》構造 *Vorstruktur* という⁸。以上から、ハイデガーのメタレベルとオブジェクトレベルの往復運動の中には構造主義的な思考を読み取れる。

次にハイデガーの意味について言及する。意味とは世界が了解可能性において開示されるところのものである。したがって、意味を持つのは世界内存在としての現存在だけであり、現存在のみが無意味であったり有意味であったりすることができる。現存在以外の存在者は全て没意味的であるとハイデガー述べる。また、ハイデガーは了解可能性は解意が行われるより前から分節されているということを指摘したうえで、これを分節するのは話 (*Rede*)⁹ であり、話が解意や言明の根源となっていると述べる。ここに、ラカンによる無意識はシニフィアンにより統御されているという理論との対応が読み取れる。

東はデリダを解釈し、動物は「として」構造の欠落により位置付けられると考えている。つまり、動物は本能的に世界の対象を知っているが、草や肉、太陽としては知らないのである。つまり、動物において解意が欠落しており、単純な了解しか生じていないと解釈できるであろう。このような関係は現実におけるイメージのやり取りの次元であり、本稿の後半ではそれを自閉症的な性質を持つ形式と論じる。

3.2 ラカン分析

ラカンによると、去勢される前の幼児はイメージの次元である想像界に住む。その後、去勢されることで人間はイメージの世界が象徴化により統御され、人間は現前にないものについて、つまり、ないことがあるという否定の存在についての思考が可能となる。第二章で検討した通り、ラカンは超越論的シニフィアン（ファルス）から流れ出るシニフィアンの連鎖により世界の構造を理解したのであった。ラカンにとって、世界はシニフィアン（言葉）で蔽われており、欲動はシニフィアンという理念的同一性により統御されるのである。しかし、去勢されてもなお想像界は存在し続けるものである。東は、この想像界という曖昧なものは「ハイデガーが「動物」に与えた曖昧な存在論的位置と正確に対応して」¹⁰いと述べ、両者の親近性を見ている。もう少し詳しく述べると、ラカンの主張した「想像界に対する象徴界の優位」とは、シニフィアン（語）とイメージの共存可能性を一旦は認めながらも、そこにシニフィアンがイメージを置き換えるという序列関係が存在することを主張するものである。

東は、ラカンが表象代理をシニフィアンとして捉えているのに対し、デリダはエクリチュールとして捉えていると考える。エクリチュールは第二章で述べた通り、同一性に統御され

ることのないものであり、たえず分割、誤配の可能性を孕むものである。この文脈に置き換えると、エクリチュールとは「シニフィアンによるイメージの止揚」が常に失敗する可能性を示すものである。デリダは『グラマトロジーについて』で、あらゆる文字は表音と表意という二重の価値を持つという。即ち、文字は音と物を同時に指し示す機能を持っており、エクリチュールはシニフィアンとイメージの混同可能性により位置付けられると東は主張する。また、東はデリダを解釈し以下のように述べる。

シニフィアンがシニフィアン（記号）であるためには、必ずなんらかのエクリチュール（物質的側面）をもたねばならない。しかし、エクリチュールはつねにイメージへと転化する危険を抱え、そのことで逆にシニフィアンの同一性は原理的に限定される。¹¹

つまり、東の図式は次のようになる。ラカン及びハイデガーはシニフィアンにより欲動が同定される世界を提起するが、デリダはシニフィアンとイメージの間の往復運動の中に欲動が蠢く世界、欲動の同定が常に解体されると同時に同一的なものへと纏め上げられる世界を提起しているのである。そして、この往復運動を形づけるものがエクリチュールであるのだ。

3.3 『存在論的・郵便的』との関係

第2章で述べた通り、東は郵便＝誤配システムをエクリチュールとシニフィアンの裏打ち構造として説明したのであった。そして、他者との間で共有されるのは無意識におけるエクリチュールのほうであった。一方、「想像界と動物的回路」においては、シニフィアンとイメージが二項対立を成しており、その両者の根源としてエクリチュールが見出されていた。この相違をどのように解釈するべきであろうか。単純に東のなかでの解釈が変化したというように捉えていいのだろうか。イメージという視点が『存在論的・郵便的』では欠如しているが、「想像界と動物的回路」ではシニフィアンの対を成すものとして前景化している。この東の理論から、否定神学は表層のイメージが深層のシニフィアンにより止揚されるのに対し、東の解釈するデリダはイメージとシニフィアンを表層に捉え、その間を繋ぐ根源として、つまり深層としてエクリチュールを捉えることができる。また、イメージとシニフィアンの運動という表層の中にも、イメージとシニフィアンの対立軸が存在しており、三つの層の関係として捉えられる可能性がある。イメージを図式の中に組み込んだ点が「想像界と動物的回路」の役割ということができるだろう。この東の理論の相違については、次章以降も常に念頭に置きながら議論を進める。

第4章 『動物化するポストモダン』

4.1 3つのモデル

一般的にポストモダンとは1970年代以降のことを言うことが多いが、東は、1914年から1989年の間にゆっくりとポストモダンに移行したと述べる。つまり、時系列に沿って近代、

移行期、ポストモダンという三つに区分する。近代という時代を東はツリーモデルで説明し、ポストモダンをデータベースモデルで説明する。移行期は、疑似的にツリーモデルが維持された時代と位置付ける。

近代のツリーモデルとは、深層にある大きな物語が表層の小さな物語のそれぞれを規定していた時代である¹²。我々は大きな物語に触れることはできないが、全ての小さな物語は一意的に大きな物語により規定されている。次に、移行期についてである。移行期において大きな物語の審級は凋落したが、人々が大きな物語を疑似的に信じるような時代である。東はここでコジェーブのスノビズム論や、ジジェクのシニシズム論を参照しながら、実質的に意味がないにもかかわらずその中に敢えて意味を見出す行動様式を移行期に特有なものであると論じる。東はサブカルチャーの文脈で例示している。オタク達にとって戦隊物やロボットアニメは根強い人気を持つが、それらはどれも似たような設定、内容であり、そこには実質的意味は殆どないが、オタク達はそこから「形式的な価値、「趣向」を切り離す」¹³というスノビズム的感性を有しているのである。ここで、コジェーブについてのスノビズム論についてももう少し詳しく言及しておく。

コジェーブは『ヘーゲル読解入門』のなかで人間と動物を分ける。コジェーブはポスト歴史において人間は無化し動物化する考えていた。コジェーブの考える人間とは、「世界や自己の（言説による）認識」を行うことで、「所与を否定する行動や誤謬」¹⁴を犯すものであると規定されており、自己を世界の中に認識し、現状を否定することで現状を変化させる存在、言い換えると歴史を作り出す存在である。一方、ポスト歴史では人間は動物化し「欠乏—満足の回路」に閉じ、世界を変化させることがない。コジェーブはこの存在様式を「アメリカ的生活様式」と述べる。

動物的欲求の充足に対して、人間的な回路を欲望という。コジェーブは『ヘーゲル読解入門』の中で、動物的欲望（欲求）のみでは自己感情が形成されるだけであるが、人間的欲望を抱くことによって初めて自己意識つまり、否定性を持つ自我に至ると述べる。「人間的欲望は他者の欲望に向かわねばならない」¹⁵のであり、欲求の次元より複雑な回路を持つのである。このような人間と動物の二項対立から漏れ出るものとして日本的スノビズムが存在している。スノビズムは人間的な価値を失っているにもかかわらず、形式的な価値を見出し続ける姿である。動物と人間の対立はハイデガーのそれと同じ構造を持つ。つまり、歴史の終焉後、世界の産出は行われないのである。つまり、そこに二重性を持った人間は存在しないということである。そこにあるのは動物的回路に充足する「アメリカ的生活様式」か、実質性を持たず形式性のみを持つスノビズムだけなのだ。

最後に、ポストモダンにおけるデータベースモデルについて述べる。移行期が凋落した大きな物語を捏造する時代であるのに対してポストモダンはその捏造を抛棄し、「大きな非物語」即ち「データベース」へと接続するのである。東のデータベースモデルはデータベースを深層に据え、表層にシミュラクルが宿ると説明する。ツリーモデルにおいては、オリジナルとコピーという対立がはっきりとしていたのに対して、データベースモデルでは最早その対立が成立せず、コピーもオリジナルもシミュラクルとして一元的に捉えられてしまうことを言う。サブカルチャーの文脈で東は例示している。つまり、デジタル技術の進歩とい

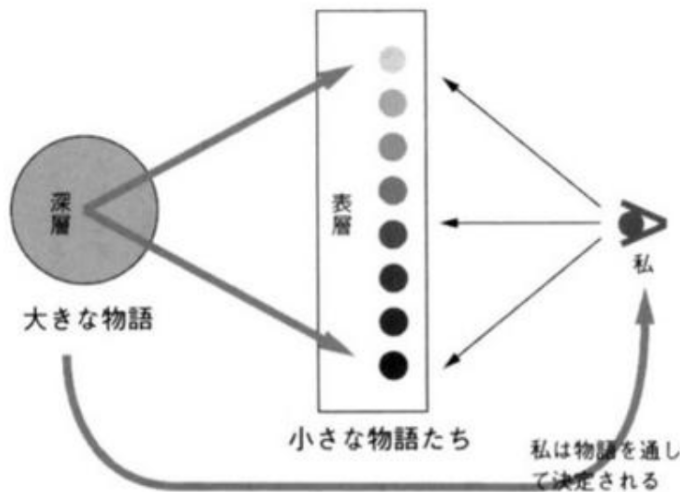
う要因も絡み、ポストモダン社会では消費者の側が容赦なく原作を改作する二次創作が盛んになった。その二次創作は原作と同じ位置を占め、両者は同じシミュラクルという価値を持ち、消費されるのである。しかし、その「シミュラクルの全面化」とも言いうる現象は決してアナーキーで制御不能なものではない。深層にあるデータベースがシミュラクルの流れを統御しているからである。東は、ポストモダンにおけるオタク的データベース消費を「解離的」と述べる。つまり、特定のキャラクター（シミュラクル）への「盲目的な没入」とともに、その対象を冷静に萌え要素¹⁶（データベース）として分析する二面性を持つのである。ツリーモデルでは、消費行動は表層の小さな物語のみに向かっていったが、データベースモデルでは、消費行動は深層と表層を「バラバラに共存」させながら、その間を常に往復し続けるという解離的な姿を持つのである。このモデルの表層部分を東は動物的であると述べる。即ち、「間主観的な構造が消え、各人がそれぞれ欠乏—満足の回路に閉じてしまう状態」¹⁷である。

冷静な判断力に基づく知的な鑑賞者（意識的な人間）とも、フェティッシュに耽溺する性的な主体（無意識的な人間）とも異なり、もっと単純かつ即物的に、作物依存の行動原理に近いように思われる。¹⁸

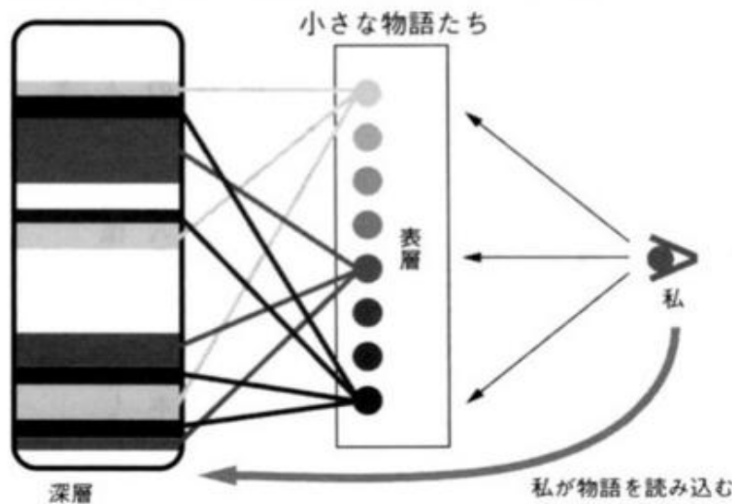
つまり、東の述べる動物化の次元とは、快—不快の回路に閉じた次元である。

東によるとキャラクターは萌え要素に分割され分析されるのであった。そして、ストーリーが先にあり、そこからキャラクターが構築されるのではなく、逆に、萌え要素の組み合わせとしてキャラクターが構築され、そのキャラクターに基づきストーリーが形作られるのである。そこで、東は萌え要素の引用可能性について述べる。アニメなどを作成するにあたり初めにあるのが萌え要素のデータベースであるならば、萌え要素は作品間を横断する¹⁹。しかし、この萌え要素の横断はある作品が他の作品に影響を及ぼしていたり、パロディとして捉えたりするというよりは、萌え要素のデータベースから無意識に似たようなキャラクターが生産されると捉える。同一のエクリチュール（萌え要素）が別の文脈に移植され別のシニフィアンとして働いている。

以上が、東のツリーモデルとデータベースモデルである。(図3参照)



(図 3a) 近代の世界像 (ツリー・モデル) 東 (2001) より



(図 3b) ポストモダンの世界像 (データベースモデル) 東 (2001) より

データベースモデルにおいて萌え要素のデータベースがエクリチュールであり、個々の小さな物語がシニフィアンであり、東はその深層と表層の解離を描いた。本稿では、エクリチュールに対して2つのアクセスの方法を提起する。1つ目は、其々のコンテキストに移植することで、シニフィアン化する方法である。具体的には、混沌としたエクリチュールを猫耳やメイド服などと分節し、冷静に分析する方法である。2つ目は表層の小さな物語に盲目的に没入する方法であり、イメージにより受容するものである。この時、萌え要素におけるエクリチュールとシニフィアンの裏打ち構造は一旦後ろに退くと考えられる。

4.2 深層と表層

東は、現代思想の文脈でよく語られる深層と表層の区別を本稿で言及した三つの書物の全てで用いている。しかし、その深層と表層の位置づけは微妙に異なっている。(表1参照)

	『存在論的・郵便的』	「想像界と動物的回路」	『動物化するポストモダン』
表層	シニフィアン	シニフィアン/イメージ	シミュラークル
深層	エクリチュール	エクリチュール	データベース

(表 1)

本稿では、前節までで述べたように、イメージとシニフィアンとエクリチュールという三つの次元を用いて心的構造の分析を試みている。そこで、本稿では表層にイメージとシニフィアンの作用があり、深層にエクリチュールがあると仮定して議論を進める。

第5章 ドゥルーズ

5.1 ドゥルーズとつなぐ

ラカンは超越論的シニフィアンという第三者を想定し、全てのシニフィアンはそこからの流出であるという円錐形の理論を構想したとされる。しかし、この超越論的シニフィアンはドゥルーズ・ガタリにとっては疑似的なものでしかない。ドゥルーズ・ガタリは『アンチ・オイディプス』の中で歴史を三段階に分けて説明する。即ち、原始大地機械、専制君主機械、資本主義機械の三段階である。そして、其々にコード化、超コード化、脱コード化・再コード化の作用が対応している。

まず、原始大地機械においては人々の欲望は大地機械に従属しており、記号が各人の器官なき身体に欲望の回路を刻む。即ち、この段階では欲望のシニフィアンとシニフィエは一對一・双数的関係を持つ。次に、専制君主機械では欲望の流れが平面的ではなく円錐的なものとなる。つまり、近親相姦を犯す専制君主という超越論的シニフィアンが、コードから逸脱する欲望の流れを上からコントロールする。最後に到来するのが現代の資本主義機械である。ここで、コード化と超コード化から抜け出て分散していく欲望の流れが現れる。これが分裂症的な様相である。元来、原始的な大地における記号には二項対立は存在していなかったが、超コード化により二項対立が疑似的に構成され、そしてその後、再び脱コード化により、二項対立は拡散していく。言い換えると脱コード化の中では欲望の流れは常に破壊され続ける。

ドゥルーズは価値の流動的な運動を支えるものとして公理系というものを想定している。公理系とは、抽象的な経済の動きを指しており、資本主義の運動それ自体のことであり、即ち貨幣のことであると解釈できる。この運動の中では、家族は脱備給され社会体の外部に置かれる。即ち、大地機械、専制君主機械においては各人を社会体に適合させるような登記が行われたが、脱コード化により家族と社会体が分断されたために個人として私人化されるのだ。

そのような状況下で欲望を馴致させようとするときに「大地的表象の残渣である「ママ」と、帝國的表象の残渣である「パパ」が動員される」²⁰と仲正昌樹は述べている。これが国家などを通しておこなわれる再コード化である²¹。再コード化とは脱コード化と表裏一体であるとドゥルーズ・ガタリは考えている。脱コード化により拡散していく流れを、再び家族の

三角形の枠内に収めようとするのが再コード化である。即ち、再コード化は事態の一面を指しているに過ぎない。それにもかかわらず精神分析はその構造を本源的なものと考え、分裂病を狂気として取り込んでいるのである。実際は逆であり、分裂病的な脱コード化の流れの中に神経症は位置付けられるとドゥルーズ・ガタリは考えているのだ。だから、精神分析が考えるようにオイディプスは近親相姦や去勢から到来するのではなく、実は資本の脱コード化した流れの一面から到来するのである。

オイディプスは、大地機械においては、みたされない空虚な極限として準備されている。専制君主機械においては、それは象徴的にみたされる極限として形成される。しかしオイディプスがみたされ、現実働くのは、資本主義機械の想像的オイディプスとなることによるのみである。²²

つまり、オイディプスとは脱コード化の中で、想像的に家族を持ち出し、欲望を説明しようとする時に精神分析が用いる概念であり、置き換えられた表象に過ぎない。そして、この置き換えられた表象が想像的次元において欲望を表象するのである。ここに、人間はイメージしか欲望しかないという倒錯的な言説が生まれ、ラカンは超越論的シニフィアンという

ドゥルーズ	超コード化	再コード化	脱コード化
『存在論的・郵便的』	形而上学システム	否定神学システム	郵便＝誤配システム
『動物化するポストモダン』	ツリーモデル	疑似的なツリーモデル	データベースモデル

欠如をそこに想定することとなった。しかし、実際、たえず生成変化する流れ一切断(表2)は去勢は存在しないし、部分対象は何も欠いていない。

ドゥルーズ・ガタリにとって、無意識の領野とは法や〈父の名〉ではなく、アナキスティックなものであり、なにも表象せずただ生産するのみである。したがって、狂気を狂気と位置付けるのは、事態の一面しかみない精神分析であるのだ。このようにドゥルーズ・ガタリの分裂分析は精神分析を解体する。

本稿の後半ではラカンに則り様々な分析を試みるが、そこで登場する父や母の言説は実は神経症者の思い込みである。即ち、本当は存在しない父や母を仮定することで、神経症者は自身の欲望がオイディプス言説に支配されていると思い込んでいるのである。そして、この思い込みこそが神経症者の心的構造である。

東は自身の理論について、そのモデルやシステムが実際に頭の中に存在するのではなく、人々が世界をどのようにイメージし捉えるかを示すものであると考えている。東は「ラカンの言えば「想像界」の話しかしていない」²³と述べている。しかし、本稿では、東には想像性の視点が足りていないという指摘を行う。このことについては第8章で振り返る。

以上から、表2のような対応関係が見て取れる。

5.2 東とつなぐ

本節では、前節までのドゥルーズと東を比較する。私は以下のように対置させることが可能であると考え。ドゥルーズが精神分析を批判する際にオイディプスは世界の一面を捉えたに過ぎないと考えていたことは特筆すべき点である。即ち、脱コード化と再コード化は表裏の関係を成しているということである。そうであるならば、移行期を否定神学システムとして、ポストモダンを郵便＝誤配システムとして位置付ける東の戦略を批判することになる。つまり、否定神学システムと郵便＝誤配システムはポストモダンにおける事態の表裏を描くのである。

このような視点を持つ論者として田中純を挙げる。田中はラカンの定式化に基づき男性的形式と女性的形式を区別し、少なくとも一つ存在している不可能性を「手紙の紛失＝外相的去勢」に集中させ、そこから象徴システムの全体に言及するという東のいう否定神学システムを「男性的」と言い、郵便空間の非一貫性に由来する全ての手紙が届くわけではないという東の郵便＝誤配システムは「女性的」と述べている²⁴。それを受け、東は『存在論的・郵便的』の註でデリダの郵便空間とラカンの女性を繋ぐ契機が存在していると述べ、次のようにアイデアだけ示している。

男性的主体は固有名の偶然性をファルス（父の名）によって「運命」へと転化するが、女性的主体はたえざる偶然に曝され続け、決して運命をつかむことがない。²⁵

第6章 東を超えて

6.1 動物化の意味

東は主に『動物化するポストモダン』の中で、ポスト歴史では人間は動物化すると考えていた。ここで、東の理論に概ね則りながら議論を展開している千葉雅也を少し参照する。千葉は論文「トランスアディクション」の中で、男性と女性を区別し、そこに女性への生成変化があり、言い換えると「動物的な愉しみ」に近づいていると述べる。この動物性への生成変化を千葉はポストヒューマニティへの移行であると捉えており、千葉は東が『動物化するポストモダン』で捉えたポスト歴史における動物化という理論に影響を受けていることは明白である。千葉は、男性が不可能なものから例外的に（否定的に）全体を構築する否定神学システムを有するのに対し、女性は「語りえぬものへと例外者を經由せずに、非例外的にアプローチする」²⁶郵便＝誤配システムを有すると考える。千葉にとって動物は東の解釈と異なり「欠乏—満足」「快—不快」の回路に閉じる存在ではない。

千葉はイメージの次元について語る。千葉の「動物的愉しみ」とは「言語的享楽と本能的渴望の中間地帯にある愉しみ」²⁷である。言語的享楽とは、ラカンの無意識における言語の統御の否定神学システムのことである。一方、本能的渴望とは純粋に物質的アディクションの次元であり、麻薬のようなものである。そこには超越論性は存在せず、平面的に欲望を直接備給させるいわば欠乏—満足の回路しかない。

千葉ははっきりと東を批判している。4.1 の最後の引用で捉えた通り東は動物的なオタク

の消費行動は、神経の次元で訓練を積み性器を興奮させることに慣れ、いわば麻薬のようなものとして捉えることができるもので、萌え要素をセクシュアリティとして受容することとは異なる²⁸と考えている。つまり、東はこのことを「ゼロ個の性という可能性」²⁹と述べる。それに対して千葉は「唯物論的に可塑的なアディクションによって変容するn個の性」³⁰へと向かうのである。つまり、千葉は動物化した人間をアディクションにより捉えることは肯定するが、単純な欠乏—満足の回路にとどまらない回路を構想している。この回路を千葉はトランスアディクションという。つまり、あるアディクションから別のアディクションへと移行する可能性を捉えているのである。この可能性は言い換えると想像界と現実界の間にある享楽に淫することである。ここに、東が『動物化するポストモダン』で捉え損ねたイメージの次元が存在しているのだ。

6.2 イメージの次元

では、イメージの次元とは具体的にどのように捉えることが可能であろうか。それは、千葉がトランスという言葉で捉えるように、自己でありながら他者となることである。野尻英一はヘーゲルの構想力を分析し、構想力には他者との疑似同調回路があると考えた。ヘーゲルは「記号 Zeichen」と「象徴 Symbol」³¹を区別する。記号も「象徴」も直感の一つであるが、前者は完全に具体的な外界と隔たったものであるのに対し、後者はいくらか具体性との繋がりを保持したものである。つまり、具体性の欠けたる記号の表象するものは他者にとっては理解することができない。

ここで野尻はヘーゲルの記号を作る空想を解釈し、他者とのコミュニケーションについて以下の様に述べている。他者の言葉はシニフィアン（記号）であると一般的には考えられているが、他者と自己との間でのシニフィアンの指すものが一致すると主張するには超越論的シニフィアンに頼るほかない。実は、そこに「象徴」（痕跡）としての語の役割がある。では、どのようにして他者の記号を我々は理解するのか。野尻のヘーゲル解釈によると次のようになる。他者が記号として言語を用いたとしても我々は他者の記号の意味については全く理解できないのだから、それを「象徴」として受け取るほかない。我々はその「象徴」を自らの空想で満たし、即ち、他者の空想の過程（記号の産出過程）を我々は空想し、「象徴」を記号化し理解する。

したがって、他者の空想し産出した記号と、それに自己が重ねるように空想した記号の外延は一致しない。だから、他者理解はいつも疑似的なものとなる。ヘーゲルによると自己認識は、自己を他者に投げつけ、そして、その自己を他者を媒介にして再直観するという手続きであるので、他者と完全に同調できるという信念は誤りであり、意味の共有には常にディスコミュニケーション（誤配可能性）が付き纏う。もし逆に、誤配の可能性のない超越論を想定したならば、そもそも記号と「象徴」は必要とならない。したがって、野尻は記号とは差異と同一の同一であると言い、弁証法的であると考えている。以上から、人間は他者と疑似的に同調することができ、それを支える能力が他者の空想を空想する能力であり、即ち構想力であるということである。

自閉症論の文脈では、他者のイメージを持つことに困難を抱く人の類型を自閉症という一

つの心的構造の枠組みで捉える。そして、逆に定型発達者という類型は他者の空想を空想する能力に長けており他者のイメージを持ちうる³²。ここで、「声」という視点が重要になる。野尻は、定型発達者は「他者の痕跡を「記号」として読み解き、想起を記憶によって上書きし、他者の声を自己の声に変換しながら聞く」³³と述べる。つまり、声というのは常に現にしか存在せず、常に消えゆくという否定性を孕むものであり、定型発達者は常に他者の声を否定性の下で自己の声として上書きすることで、逆説的に他者の声を自己の内に浸透させることができる存在であるのだ。また、定型発達者にはその声という媒介による他者のイメージの形成に先立ち、他者と欲望を共鳴したいという根源的な欲望が存在する。そして、鏡像段階を経験した後の想像性がその欲望を喚起すると考えられる。逆に自閉症者にとってはそのような欲望は存在せず、他者の声は自己に浸透せず、即ち、他者の声は無媒介に（否定されずに）直接的に襲いかかってくる。

以上の、議論を本稿における用語に置き換えていきたい。野尻の指摘は「声」というものが他者との連結において非常に重要な役割を持つことを示している。声とシニフィアンの間にはズレが生まれる。例えば私がある語を声に乗せ発するとする。私はその語に何かしらの意味を持たせようとしているとすると、その語はシニフィアンと言いうる。しかし、他者はその語をシニフィアンとして捉えることはできない。なぜなら超越論的シニフィアンは否定神学における幻想に過ぎないからだ。そうすると他者は私の発した語をシニフィアンとしてではなく、その内部に私が何かしらの意味を持たせたと予想される痕跡（「象徴」）として受け取るほかない。つまり、声はイメージを喚起する箱として機能する。東の文脈で指摘した通り、イメージはシニフィアンにより止揚される。私の声は私にとっては止揚された後のシニフィアンであるが、一方他者からすると、声は止揚されたものがそこにあるということを示すのみである。他者はその箱（痕跡）に再びイメージを働かせ（空想し）独自にシニフィアンに止揚させる。以上の止揚の手続きは空想に依拠するものであるゆえ、常にうまく語の意味が伝達されるわけではない。つまり、箱は無色透明の四角い箱ではなく、他者が発話した痕跡の残るものであり、我々はその痕跡をもとにイメージを働かせている。

以上のような手続きの中で、再コード化による超越論的シニフィアンの統御の手続きも同時に行われる。つまり、伝達というのは常には上手くいかないということを示したが、超越論的シニフィアンを仮定し、伝達が常に上手くいくと思いつむ。つまり、超越論性により、シニフィアンとシニフィエが一義的に結びついていると思いつむ。東の言葉を借り言い換えると、シニフィアンの伝達経路の誤配可能性を抹消している。ドゥルーズを参照すると、この思いつみを成り立たせるものが人間の想像性の機能であると言うことができる。

6.3 深層にあるもの

会話が円滑に進むにはある水準の背景知識の共有も必要である。この背景知識、コンテクストが会話を行う際に深層に存在しているのだ。再び前節の箱の比喩に戻ると、コンテクストが、箱がどのような痕跡を持つかを定めることになる。言い換えると war という箱はドイツ語話者にとっては「存在した」というシニフィアンとして止揚されていたものとして、英語話者にとっては「戦争する」というシニフィアンとして止揚されていたものとしての痕跡

として解釈される。このように、エクリチュールは文脈（コンテキスト）に移植されることで初めてシニフィアンとしての意味を持つ。

この背景知識の共有は他者とのコミュニケーションにより成立すると考えられる。語にはその語が使用される共同体内の関係性が織り込まれている。例えば他者と会話を重ねるうちに他者との間のコンテキストは完全とは程遠いかもしれないが、次第に措定されていく。例えば、会話を重ねるうちに「この人は哲学的知識は全くない人だ」と次第にわかってきたとする。その人に対して、「それは“無知の知”だね」と返答することは稀であろう。つまり、そう発話したとして相手に伝わる可能性が殆どないからである。（しかし、もしかしたら「無知の知」の意味を知っている可能性もあるかもしれないので、他者との間のコンテキストの完全な措定はないが。）「無知の知」という語には、学問の素養を持つ共同体内での関係性というものが内在しているのである。

以上の他者との間のコンテキストを特定しようとする能力も相手をイメージする能力である。そして、「他者の痕跡を「記号」として読み解き、想起を記憶によって上書きし、他者の声を自己の声に変換しながら聞く」³⁴というイメージ、シニフィアン、エクリチュールの三層の運動が成り立つのである。このように捉えるならば、最早深層と表層の区別は無効となる。即ち、会話における表層の空想の次元も、深層のコンテキストの次元もイメージ、シニフィアン、エクリチュールの運動として捉えられるからである。

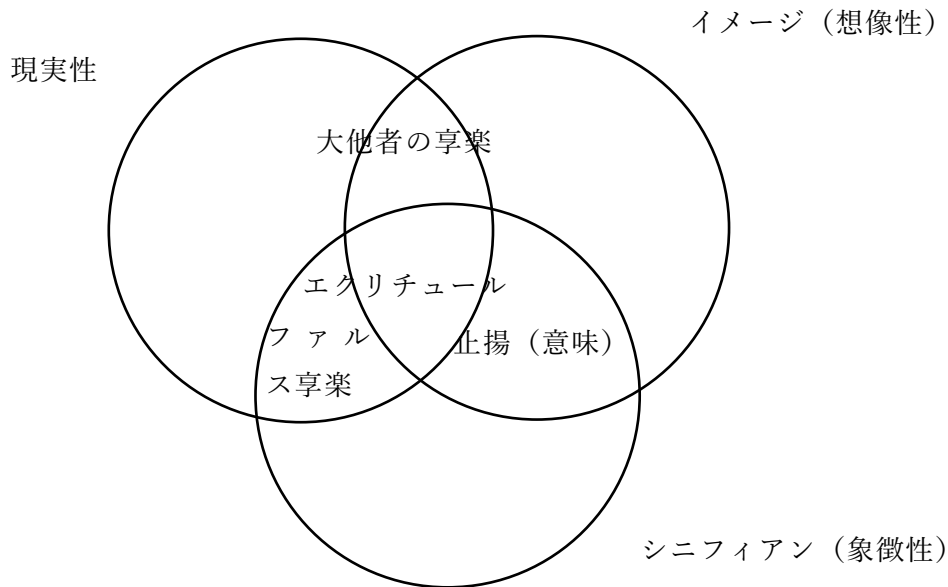
次章では、〈男性的形式〉と〈女性的形式〉をモデル化し両者でこの手続きにどのような差異があるか見ていく。

第7章 想像性という視座

本稿では東の議論では、イメージに対する分析が足りていないのではないかという問題意識を持ちつつ分析し、ポストモダンにおいて欲望は欠乏—満足—のイメージの回路に閉じるという東の動物化についての主張に対して批判してきた。超越論的シニフィアンは仮想的なものでありイメージという次元について言及することで超越論に陥らないようなシステムを示すことができたと考える。東の郵便=誤配システムでは、他者という視点がきちんと考察されていなかった。具体的には、東はフロイトの無意識の転移という臨床から、無意識において他者とエクリチュールは連結すると述べただけであった。しかし、この東の理論では自閉症的な性質をもつ話者が存在することに対して有効な答えを示すことができない。何故なら、東の理論ではエクリチュールは人間同士で共有されるものであり、そのエクリチュールの共有における誤配可能性の視点が欠けているからである。

動物は、世界をイメージとして捉える能力を持つ。ハイデガーは人間と動物の違いを《として》という先構造を持つかどうかとして捉えたが、イメージを止揚させることで、シニフィアン、エクリチュールと結びつけ、さらに他者のイメージをイメージするのが定型発達の会話であると第6章では提案した。逆に自閉症的な性質を持つ形式はイメージをイメージする能力を欠く。本章では、このイメージの次元、言い換えると想像性という東にとって欠

如している感覚を更に精緻化していく。本章で提起するのは以下の図4である。図4はラカンの『サントーム』を参考にして作った図である。ラカンは、現実界、想像界、象徴界をボロメオの輪というどれか一つの輪が外れると全てバラバラになるという理論を用い説明する。そして、三つの輪の真ん中には対象 a がある。本稿では、現実性、想像性、象徴性の真ん中にエクリチュールを置き議論を進める。但し、対象 a とエクリチュールは別物である。



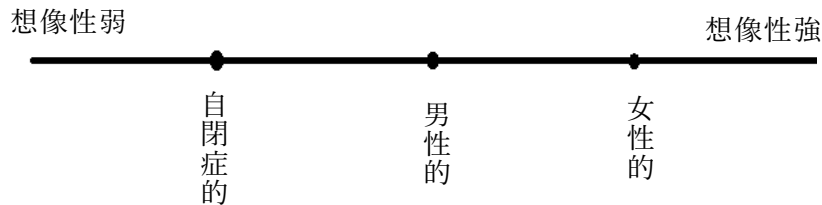
(図4)

7.1 想像性によるモデル化

私は、本節で心的構造を想像性を軸にモデル化していき、次節以降で東を批判する。まず、想像性に対する感度の強弱を示す軸を考える。そして、以下の図の通りに3つの心的構造のモデルを配置する。ここで、〈自閉症〉、〈男性〉、〈女性〉というタームが用いられているがそれは、実際の自閉症、男性、女性を表すのではなく、便宜的に想像性の感度の強弱を表すタームとして用いているに過ぎない。

千葉は前掲論文で、人間 (=男性) とイメージに淫する動物 (=女性) という対立を設けて動物化の理論を構築していた。私は本稿で、上の図 5a 及び表 3 からわかるように、脱コード化の流れは自閉症的な性質を持つ形式と女性的形式という二つの方向へ向かうのではないかという議論を展開する。千葉はラカンを参照し、全ての男性は去勢されており ($\forall x \neg \Phi x$)、言語的存在者であると述べる。一方、去勢されていない男性が少なくとも一つ存在しており ($\exists x \Phi x$)、それは例外者としての地位を持つ。この一人の例外の存在が「すべて」の男性ということを考えることを可能にする。つまり、男性的形式は、「不可能なもの」「語りえぬもの」を超越論的な一者に任せ、逆説的に男性としての有限集合を確定させ、世界を否定的な仕方ですべて化する。したがって、ラカンにとって享樂はファルス享樂 ($S \rightarrow a$) のみである。言い換えると男性は女性の身体を享樂することができず、フェティッシュ (=対象

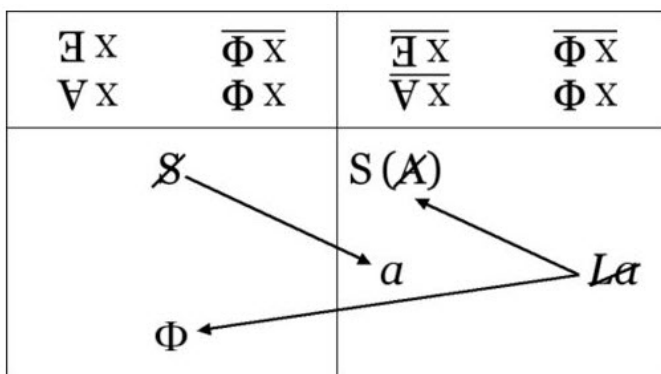
a) にしか向かうことはできない。結局男性は女性を享樂しているつもりであるが、自身のファルスを享樂しているだけである³⁵。つまり、男性的形式とは東のいう否定神学システムのことである³⁶。



(図 5a)

	自閉症的	男性的	女性的	
脱コード化		再コード化		脱コード化

(表 3)



(図 6)ラカンの男性 (左) と女性 (右) ラカン (2019) より

ここで、「つもり」ということについて少し言及しておく。全ての男性は去勢されているが、去勢されていない一者が存在した。しかし、男性はその一者を隠蔽する。つまり、言語化できないものの存在を隠蔽し、逆にそのことで世界を安定化させる。男性的形式は、言語化できないものの存在を認めてしまうと、世界を構築する言語的枠組みであるシニフィアンが崩壊し、自我を失うことになってしまうと考えられる。そうならないために、男性的形式は言語的空想を働かせることで、世界の全体に至ることができると信じ込む。ラカン派のタームで言い換えると、男性は大他者における享樂を想定することで、「不可能なもの」が存在することを隠蔽するのである。例えば、「「世界のすべてを牛耳り、すべてを享樂している黒幕がどこかに存在するのではないか」という陰謀論や、「我々の身近にいる外国人が、我々の享樂をうばっているのではないか」というレイシズム」³⁷を松本卓也は挙げている。男性的形式は、世界の全体という語りえないものをもシニフィアンにより語り尽くそうとするのである。

以上の議論を本稿の文脈に置き換える。男性的形式は「すべて」の外にある一者に「不可能なもの」を委ねることで世界の全体性を否定的に担保させる。そして、男性的形式は郵便空間の誤配可能性を隠蔽する。手紙は必ずしも宛先に届くわけではないというのが郵便=誤配システムであるが、男性的形式は宛先に届いているはずであると思込んでいる。そして、

男性的形式にこう思いこませるのが、空想である。但し、その空想は象徴的なものである。以上から男性的形式の成立には想像性が働いているが、その想像性は象徴システムに取り込まれているということが明らかとなった。

女性的形式はラカンにより、全ての女性が去勢されているわけではない ($\neg \forall x \Phi x$) が、去勢されていない女性がいるわけではない ($\neg \exists x \neg \Phi x$)、と定義されている。後項は女性的形式もファルス享樂に従わないわけではないが、女性的形式は例外を想定することなく、普遍は担保されないことを示し、前項では「全ての女性」という概念を持つことはできず、一つ一つの女性について語らなければならないことを意味する。したがって、女性的形式にとって享樂はファルス享樂でもありうるが、同時に男性的形式が抑圧する大他者の享樂でもありうる。大他者の享樂とは想像界と現実界の間にあるもので、恍惚などの神秘的イメージのことである。千葉はこの女性的形式の「すべてではないイメージの愉しみ」は「動物的な愉しみ」³⁸に近しいものであると述べる。つまり、女性的形式は「不可能なもの」を空想により隠蔽することはなく、つまり、例外的な一者を介することなく「不可能なもの」へとアプローチする手続きを持っているのである。言い換えると、女性的形式にとって、不可能なものは不可能なものでないもののなかに、含まれており、男性的形式からすると不可能なもの、語りえないものは、女性的形式にとって、大他者の享樂としてアクセス可能である。したがって、女性的形式にとって、不可能なものは不可能ではない。

千葉は前掲論文の中で、女性的形式の場とは誤配可能性に満ちた郵便空間であると述べている。女性的形式は脱コード化の流れの中で、イメージを働かせることにより享樂を享受するのである。女性的形式も言語を操る存在である以上、シニフィアンによるイメージの止揚の作用は働いていると考えられるが、女性的形式は他者との完全な伝達はそもそも不可能であること前提している。女性的形式は男性的形式のように、伝達が完全にうまくいっているということを想定せずにその都度誤配される可能性を受け止めながら、相手の発話をイメージとして受け止める。

全ての男性的形式は去勢されているので、男性的形式は伝達に誤配可能性が宿ることを隠蔽し、伝達は常に完全に行われると考えるのであったが、一方、女性的形式において、全ての女性的形式が去勢されていないわけではない。つまり、全ての女性を定式化するものではなく、女性的形式は伝達が上手くいっているかいないかに無頓着であるということが導かれる。繰り返すと、男性的形式にとっても、女性的形式にとっても誤配可能性は宿っているが、前者がそれを一者に封じ込め隠蔽するのに対し、後者は誤配可能性自体に無関心であると言いうる。そこで、女性的形式にとって重要なのは語のシニフィアンではなく、語という箱に相手が残した痕跡を共有することであり、言い換えると他者とイメージを共有することで、享樂を享受しているのである。但し、本当にイメージが完全に連結しているわけではない。完全な連結は後に述べる母子一体の関係である。女性的形式におけるイメージのシニフィアンによる止揚は常に不完全である。よって、他者の声を自己の声として聞くという男性的形式の手続きは弱く、他者とイメージを媒介することで連結の回路を持つということ、即ち他者との関係性を重要としている。言い換えると、シニフィアンとイメージの往復運動の根柢にあったエクリチュールを、言語を媒介することなくイメージにより受け取るので

ある。イメージ、シニフィアン、エクリチュールという三つの層を考えると、女性的形式はシニフィアンの働きが弱いのである。

前章では、箱は他者の止揚の手續きの痕跡を残すと述べた。男性的形式は例外者を設定し、世界を普遍化するので、その箱を独自にシニフィアンにより止揚することで理解しようとするのに対し、女性的形式はその箱そのものを共有することを欲する。この女性の享樂の享樂の仕方が、東の文脈では無意識におけるエクリチュールの連結として表現されていることである。しかし、東は止揚の手續きの誤配可能性については述べるものの、この連結の手續きの誤配可能性については言及しない。

例えば、「それはカント的ですね」という発話を想定してほしい。発話者はカントのように几帳面であるということだけを述べただけかもしれないが、聞き手が「カント的」という語にカントの難解な哲学理論を読み取るかもしれない。男性的形式も女性的形式も自己のイメージでカント的という語の痕跡をイメージするのであり、この点では両者は同じであるが、話が進むにつれ、会話がどこかすれ違うようになる。あまりにも食い違いが大きく、会話がうまくいかない場合は別であるが、その食い違いが些細な場合、男性的形式は「カント的とはどういう意味？」と問い、発話者の意図を尋ねることで、再び伝達の上手くいつている（と思いつ込んでいる）世界に戻る。一方、女性的形式にとって些細な食い違いであれば、話に食い違いが生じているという意識を抱くことはない。女性的形式にとって伝達はもともと不完全であるので、そのまま会話は続いていくと考えられる。イメージの機能が強く、いつも止揚の手續きがきちんとして行われているわけではない女性的形式は他者との間のコンテクストを特定しようとするのではなく、他者との通路を重視するのである。

最後に自閉症的な性質を持つ形式について少し言及する。自閉症的な性質を持つ形式は快—不快のイメージの中に留まっている。一方、定型発達者は快を齎すものが不在になることに気付くことで、世界を象徴化するので、快—不快のイメージの回路には簡単にはアクセスすることができなくなる。前章で述べた通り、自閉症的な性質を持つ形式にとって、現実界は直接、つまり象徴化されることなく侵入してくるので、そこに意味は存在しないのであった。自閉症的な性質を持つ形式にとっては、イメージのシニフィアンによる止揚の手續きが定型発達者のようには行われておらず、世界は現実界と快—不快のイメージであると解釈される。松本は、自閉症者について以下のように述べる。

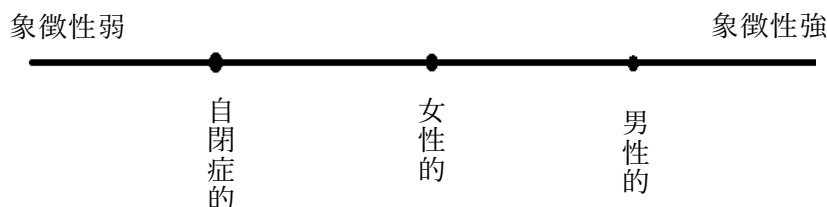
症例ロベールにみられた「狼！」というひとつきりのシニフィアンの反復は、ララングを他のシニフィアンに置き換えることなく、ララングのまま絶えず中毒的に反復する試みであると考えることができる。³⁹（傍点は筆者による）

ララングとは他のシニフィアン（ S_2 ）が現れる前の語であり、子はララングに対して困惑すると同時に自体性愛的な享樂を享受する。定型発達者はこのトラウマ的な原初のシニフィアンであるララング（ S_1 ）と折り合いをつけ、他の新たに獲得したシニフィアン（ S_2 ）により置き換えることで、象徴秩序を構成する。しかし、松本によると、自閉症的な性質を持つ形式はシニフィアンが無限に結びつき合っている象徴秩序に侵入することを拒む存在であり、彼らは

ラrangを情動的に反復することで自体性愛的な快を享受していると述べる。確かに、自閉症的な性質を持つ形式も言語を持つ。しかし、それは定型発達者の持つ言語とは異なり、他のシニフィアンと結びつかないひとつきりのシニフィアン(S₁)として現れるのである。そして、象徴秩序の獲得以前にある自閉症的な性質を持つ形式はラrangにより中毒的に享楽を享受すると松本は述べる。即ち、自閉症的な性質を持つ形式は物質的アディクションの次元と近い存在であるということがわかる。

また、自閉症的な性質を持つ形式の言語使用はラrangによる享楽の享受だけではない。S₂の次元が自閉症的な性質を持つ形式にも存在しており、その次元において、言語使用が意図せずして換喩的になってしまうのだ。男性的形式と女性的形式はともに細部に差異はあるものの、他者の声を自己の声として上書きし聞いているのであった。この定型発達の声の様式において、原初的享楽の痕跡としての対象aが存在している。しかし、自閉症的な性質を持つ形式は対象aを拒む。第2章で述べた通り、対象aが語の剰余を保証するのでであるとすると、対象aとの分離を経験しない語は剰余を持たない表面的なものとなる。つまり、自閉症的な性質を持つ形式にとって、S₂は深層と分離させられた純表層的なものとなり、そこに字義通り以上の意味はない。従って、修辞としての隠喩と換喩は成立せず、換喩的なものとして無限に横滑りしていくような言語使用が展開される。ドゥルーズは『意味の論理学』でルイス・キャロルの言語使用が表層に終始していることを見て取るが、松本はそれを自閉症的な言語使用として解釈している⁴⁰。

7.2 象徴性によるモデル化



(図 5b)

前節で述べた通り男性的形式はイメージを常にシニフィアンに止揚させる言語的存在であり、ハイデガーが現存在と述べたような心的構造を持つのであった。つまり、男性的存在は脱コード化の流れの中で、超越論的例外者を想定し、世界はシニフィアンの連鎖により分析されると思い込んでいる（再コード化する）存在であった。このように言葉は完全に伝達されるはずだと思込む構造から、男性的形式は象徴性が強いと述べる。また、逆に自閉症的な性質を持つ形式は現実界に近い存在であり、そこにイメージを働かせて、快—不快を受け取っていた。したがって、自閉症的な性質を持つ形式は象徴性も弱いと考えられる。相川翼は構想力を分析し、自閉症者は「直接性の傍ら」に存在しており、〈直接性に依存する構想力〉は働いているが、〈定型発達の構想力〉は働いていないと述べる。定型発達者は自我の形成に伴って、快—不快のイメージを〈定型発達の構想力〉により抑圧しており、システムと共感により世界を認識していると述べる⁴¹。前節で、自閉症的な性質を持つ形式と物質的ア

ディクシオンの次元が近いところに位置していると述べた。しかし、両者には決定的な違いが存在する。それは、前者が直接性の傍らに位置しているのに対して、後者が純粋な物質性の次元に存在していることである。即ち、自閉症的な性質を持つ形式にとって、象徴性と想像性は弱い、存在しないわけではない。(即ち、〈直接性に依存する構想力〉が働いている。)

本稿において自閉症的な性質を持つ形式は快—不快のイメージの回路に留まる存在であると考えている。この意味におけるイメージと、前節で解説した定型発達者である男性的形式や女性的形式が扱うイメージ(図4の中に位置付けられているイメージ)は異なる意味を持つ。相川に基づくと前者が〈直接性に依存する構想力〉であり、後者が〈定型発達の構想力〉の作用である。後に詳しく述べていくが、東は自閉症的な性質を持つ形式的なイメージに対する考察は行っているが定型発達のイメージに対する考察は不十分である。

物質的アディクシオンの次元は図5bの自閉症的な性質を持つ形式の地点よりさらに左に存在する。そうすると、千葉が「言語的享楽と本能的渴望の中間地帯」という地点がはっきりする。つまり、それは女性的形式のことであるとわかる。このように解釈すると、千葉のトランスアディクシオンはどのように解釈されるだろうか。先に野尻に則り、トランスとは自己でありながら他者となる契機のことであると述べた。もう少し詳述すると、トランスアディクシオンとは女性的形式が、男性的形式のように大他者の享楽の享受を否定神学的に想定するのではなく、直接享受するあり方のことである。大他者の享楽は言語化不可能な次元で他者へとイメージを働かせ、他者の感情が自己に侵入してくることである。先に、私が箱の比喻で述べた通り、他者の箱を共有する。但し、そこではシニフィアンを正確に伝達することは意図されていない。

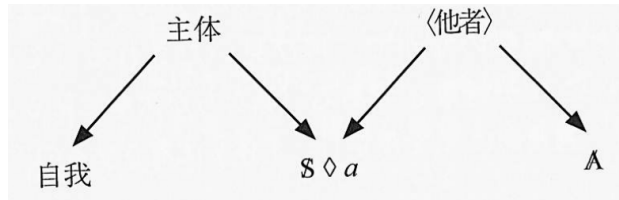
7.3 鏡像段階

本節では再びラカンを参照し、女性的形式を更に定式化する。まず、その為にブルース・フィンク⁴²が仮説的な「母子一体」と表現するものについて述べる。

ラカンによると、人間は大他者の欲望するものと同じ仕方において欲望する。これを母子の関係で言い換えると、子は母の欠如しているところを、即ち、母の欲望の全体を自己で埋めようとする。具体的には子の欲望はそれを母の欲望と一致させようとする欲望であると解釈できる。母の要求に対して全て子が答える関係である、この母子一体を、フィンクは母子の無媒介な関係であり、それは「現実的な結びつき」に相当すると述べている。そして、これは双数関係であり、ドゥルーズが原始大地機械であると述べるものである。そして、この結びつきが現実的であるということから明らかなように、千葉のいう物質的アディクシオンの次元であることがわかる。この関係は具体的には、自身の口、舌から分離していないものとして母の乳房を経験する状況である。しかし、この試みは必ず挫折する。なぜなら、母も去勢されていないわけではなく、子への欲望と別のものを欲望するからである。母は洗濯をしたりご飯を作ったりするために、子の前から姿を消すことがあるのだ。

対象 a はここで、仮説的な母子一体が崩れたときに生産される残余 remainder として、すなわち母子一体の最後の痕跡、母子一体を想起させる最後のもの reminder として理解

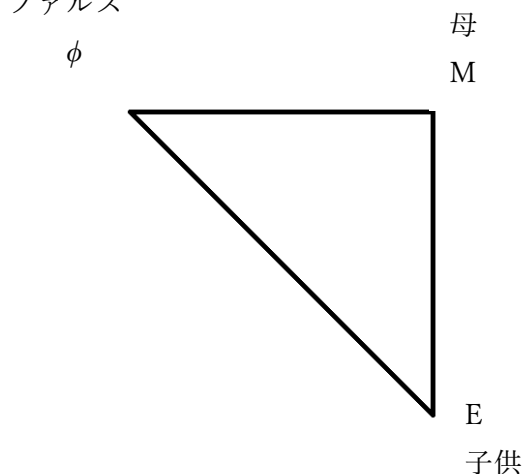
できる。このような残余＝想起させるもの $rem(a)inder$ にしがみつ়くことで、分割された主体は〈他者〉から放逐されているにもかかわらず、全体性の錯覚を維持することができる。⁴³



(図7) フィンク (2013) より

上記の図7はフィンクが『後期ラカン入門』で使用した図であり、完全な主体が欠如態になるのに伴い、大他者は欠如する大他者と対象 a に分離し、そして主体は対象 a と結びつきファンタスムを構成するという図式である。ここで、母子一体は欠如しない主体と欠如しない大他者の結びつきであると解釈できる。しかし、母は去勢されていないわけではないので、母子一体の関係は仮想的なものでしかないということである。言い換えると、大他者は欠如しているので母子一体の経験は「不可能なもの」である。それに伴い主体は S となるので、子はファンタスム S ◇ a により仮想的母子一体を再発見することしかできない。この経験を子はかつて存在したものであると仮想するが、実際は対象 a という残余から再発見しているだけなので、実は失われた母子一体の感覚は初めから存在しなかったものである。

では、ありうる母子の関係とはどのようなになるか。ラカンは『無意識の形成物』でエディプス・コンプレクスを三つの段階に分け再構成する。この第一段階においてさえ母子の関係は三角形である。以下の図8は松本がエディプスの第一の時について説明する際に用いた図である。



(図8) 想像的三角形 松本 (2015) より

先述した通り、母は子の前から不在になることがある。子は何故母が現前、不在を繰り返すのかを問い、その原因は母が自分でなく、ファルスを欲望しているからであると想像するようになる。そして、子は母の欲望の原因であるファルスに想像的に同一化しようとする。逆に母は現実の子供 E との関係だけではなく、自己の欠如を埋めてくれるファルスである想像

的孩子を求める。この母の二重化した態度は、前節までで述べた女性的形式のイメージのあり方と同じである。即ち、現実的子供そのものには触れることはできず、自己のイメージによりそれに触れる。この第一段階では、子にとって母は現前と不在を繰り返す「前駆的大他者」であり、原一象徴界としての役割を持っており、子は母（前駆的大他者）の欲望する ϕ に想像的に同一化しようとする。これが、鏡像関係の図式である。言い換えると、人間は他者の視線を内在化することで自己を自己として措定することができ、自己の意識は常に内在化された他者から見られる自己であると考えられる。従って、鏡像段階は主体の欲望を（前駆的）大他者の欲望の欲望として承認させ、（原一）象徴界を形成するものであり、母子一体からの疎外の上に成立するのである。このプロセスから明らかなように、母は子を満足させることができない。子は母と双数関係であろうとするが、そうしようとしている時点で既に、その状態は夢に過ぎない。

エディプスの第二の時では、母（前駆的大他者）の現前と不在を統御するものが、実はもう一段上位の審級である父にあることを子は悟り、エディプスの第三の時で、母の欠如を埋めるファルス Φ を自分は持たないが、父はそれを持つということを理解する。そして、子は父のようにファルスを持ちたいと願い父に象徴的に同一化しようとする。以上の三段階がエディプスのメカニズムであり、この手続きを経て去勢が完了するのである。

ここで重要なのはラカンが大他者と述べるものには二つの水準があることである。即ち、「シニフィアン場としての大他者」（母＝前駆的大他者）と「法場としての大他者」（父の審級）である。「精神病患者は〈父の名〉によって二重化される前の前駆的なシニフィアンの世界（原一象徴界）に住んでいる」⁴⁴と考える。即ち、エディプスの三段階の手続きが上手くいっておらず、去勢が完全になされているわけではないということである。ラカンがここで精神病と考えるものは、本稿で再三言及している女性的形式のことであると考えられる。従って、女性的形式は大他者に象徴的に同一化することができず、想像的に前駆的大他者に同一化する次元に留まっているのである。

クリステヴァはサンボリック（象徴界）とセミオティック（原記号界）を区別する。セミオティックとは「シンボルの法の規則とは異なるが、一時的な分節を与え、継続してやり直ししながら、切れ目をつくりだしていること」⁴⁵であり、母の身体に由来するものである。そして、シンボル化の手続きを経た後でも、詩や音楽などの芸術の詩的言語を通して、セミオティックはサンボリックの完全性を揺さぶるのである。しかし、誤解してはならないのは、詩的言語はシンボル化を経た後に回帰してくるセミオティックであるということである。

一方、バトラーはクリステヴァを批判し、母の身体であるセミオティックは人間の生物的本質にかかわるものではなく、実は文化の構築物であり、クリステヴァがセミオティックを実体的なものとして扱うことを批判する。本稿では先にドゥルーズを参照することで、父や母、シンボル化などという概念が去勢後に去勢前を仮想したものに過ぎないことを指摘した。バトラーはクリステヴァに同様の批判をしているのである。つまり、シンボル化後に、それ以前に母としてのセミオティックがあったことを事後的に想定しているに過ぎず、その想定は既に文化の支配下にあり、本当はなかったかもしれないものを想定しているに過ぎないのである。

エディプスの三つの時の理論では、父への象徴的同一化により去勢が完了される。しかし、クリステヴァを参照することで、去勢後も原一象徴界であるセミオティックは詩的言語を介して回帰すると考える。しかし、詩的言語は対象 a とは異なる。対象 a が意味を持たないフェティッシュであるのに対して、「詩的機能は意味作用 (Bedeutung) を維持している」⁴⁶。何故なら、詩的言語はセミオティックの事後的な想定であり、サンボリックを経験した後に生じるからである。即ち、サンボリックをシニフィアンと言い換えると、詩的言語はエクリチュールと同等の地位を持つ。つまり、詩的言語も元々はイメージの止揚としてのシニフィアンであったが、それが詩として書き表されることで、他者の痕跡となっているのである。

7.4 自閉症的な性質を持つ形式とラカン

松本はタスティンとロランを讀解し、次のように述べる。

自閉症者がこのような不定形の享樂 (ブラックホール) に襲われるのは、鏡像段階が機能しておらず、身体がまとまりを欠いているからである。そこで彼らは、縁の構造をもつ身体器官に殻(carapace)をつくりあげ、その中に不定形の享樂を閉じ込めようとする。

47

つまり、先に述べた鏡像段階が自閉症的な性質を持つ形式は機能していないので、外界と関わる際に定型発達者とは全く別の手続きを行っているのであり、それが不定形の享樂から身を守る「縁」の構造である。自閉症的な性質を持つ形式は鏡像段階を経験しておらず、原一象徴界が不成立であるので、母の不在を象徴化することができず、その不在=欠如は無限の欠如として経験される。それを不定形の享樂 (ブラックホール) と呼ぶ。言い換えると自閉症的な性質を持つ形式にとって世界は「ありであるもの」しか存在しない。そこには、不在は存在しないのである」⁴⁸。一方、鏡像段階を経験している定型発達者は母の不在=欠如を不在=欠如がそこにあるということとして経験することができる。つまり、現実からの対象 a の抽出が行われていない自閉症的な性質を持つ形式にとって、現実には「ありであるもの」しか存在しないものであり、欠如を持たない他者として襲いかかってくるということである。

そこで、自閉症的な性質を持つ形式は自己の世界と他者の世界を分割するために、縁の構造を形成するのである。一方において、自己の内側で現実を快—不快のイメージで受け止め、そこから S₁ 的な享樂を得る。誤解してはならないのは、ここにおけるイメージは定型発達者のイメージとは連続的ではあるが異なるものであるということである。つまり、自閉症的な性質を持つ形式は現実界に近い存在であり、定型発達者的な想像界は未成立である。本稿では、自閉症的な性質を持つ形式におけるイメージを原一想像界と位置付けることにする。

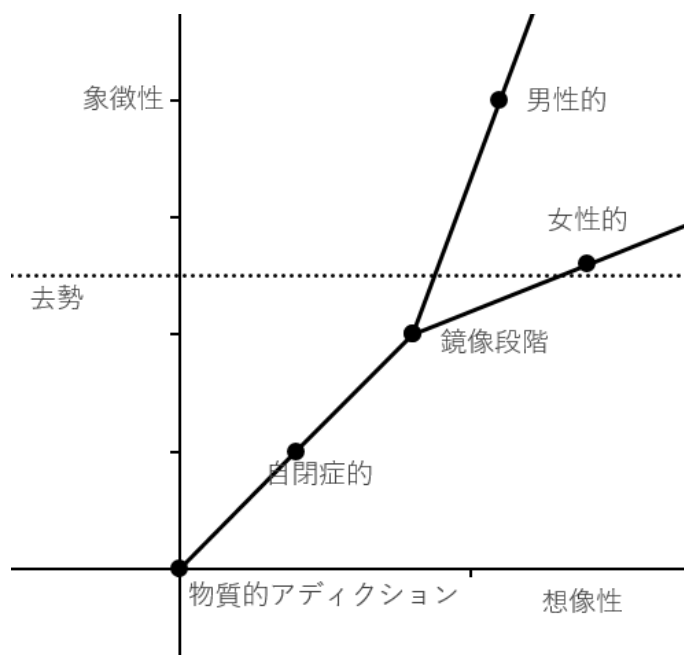
他方において、自閉症的な性質を持つ形式は言語の世界 (S₂) へと関わる。しかし、自閉症的な性質を持つ形式にとって、世界は欠如を持たない大他者 A であり、対象 a の抽出は行われていないので、自閉症的な性質を持つ形式の言語使用は表面的なものとなるのである。千葉が述べるように、このドゥルーズがキャロルを参照し表面的言語使用であると言うものはエクリチュールのことであると考えられる。つまり、去勢以前に留まる、自閉症的な性質

を持つ形式のシニフィアン連鎖はコンテクストを持たない、エクリチュールとしてあるのだ。

そうすると、エクリチュールが深層にあるのか表層にあるのかが曖昧になる。本稿ではここまで二層構造を維持しつつ議論を進めてきたが最早二層構造は有効ではない。即ち、現実性、想像性、象徴性の間に序列関係はなく、それぞれが同じ位相で結びつくのである。従って、その3つ領域の全てに関わるところに位置するエクリチュールも同様、二層構造に位置付けられるものではない。東はエクリチュールを深層として考えていたが、それはラカンのいう無意識（つまり言語により統御された無意識）とエクリチュールを短絡的に結び付けたからであると推測される⁴⁹がこれ以上立ち入らない。

7.5 男性的形式と女性的形式の分析

ここまでで述べてきた、男性的形式と女性的形式、自閉症的な性質を持つ形式について、想像性を横軸にとり、象徴性を縦軸にとると以下の図のようになる。先にも述べた通り、本稿の男性的形式などの術語は、精神分析の知見などを取り入れて、人間の心的構造を単純にモデル化したものに過ぎず、男性的形式とセックスの上での男性、あるいはジェンダーとしての男性、性自認や性的志向としての男性とは別の概念である。



(図 9)

現実界は図の全体に広がっているが、原点の物質的アディクションの次元は象徴性と想像性がなく、現実性がすべてを占めているのに対し、原点から遠ざかるにつれて象徴化と想像化の影響が強くなる。

最後に図 9 における男性的形式と女性的形式に注目する。両者の原点までの距離は後者のほうが近い。即ち、現実界の作用は女性的形式のほうが男性的形式よりも強いということを意味している。

フィンクは女性的形式のほうがより現実性に近いということを以下のように述べる。

多くのフェミニストは、自分たちの仕事を別の観点—女特有の想像的あるいは全定立的

／前記号的な水準における経験に関わる観点—から考えているけれど、それは、より厳密にラカンの観点からは、そして過度に単純化してしまう危険はあるが、現実的なもの（現実的な〈他者〉、あるいは享樂としての〈他者〉）を主体化しようとする試みとして理解することができるかもしれないのである。⁵⁰

そして、フィンクは、ラカンの対象 a という用語の意味の変化についても言及している。即ち、初期ラカンにおいて対象 a は原初的享樂の最後の残渣として捉えられ、欲望の向かう対象としての地位を持っていたが、ある時期から、対象 a は対象(a)と書かれるようになり、想像的領域から現実的領域へと移行した。対象(a)は欲望の対象ではなく原因としての地位を持つ。具体的には、それは大他者の欲望であり、大他者のまなざしや視線といったものである。まなざしや視線というものは象徴化することが困難なものであり、象徴的去勢が済んだ後も残り続ける現実界の残渣と考えられ、それが、欲望の原因となるのだ。そして、フィンクはこのような意味において、「〈男〉」のもとに見いだされるすべての要素は象徴的なものと関係しており、「〈女〉」のもとに見いだされるすべての要素は現実的なものと関係している⁵¹と考えている。

斎藤環は、「女性だけが身体を持っている」⁵²と述べる。つまり、男性も身体は持っているが、その身体性を折りに触れて意識するのは女性的形式であるのだ。斎藤によれば、男性にとって身体は苦痛を感じない限り意識されない透明なものであるのに対し、女性のほうが想像性が優勢であるゆえに、女性にとって身体は着ぐるみのようなものであり、「他人の目から見た自分の身体」⁵³としてイメージを媒介にすることによって意識される。ここで、身体性と女性の関係について引用する。

そもそも「女性性」とはいかなる本質もない。それは徹底して表層的なものであり、それゆえにこそ女性性は身体性に等しいものとなる。なぜなら精神分析的に言えば、身体とは想像的なものであり、確固たる基盤を欠いた幻想に他ならないからだ。⁵⁴

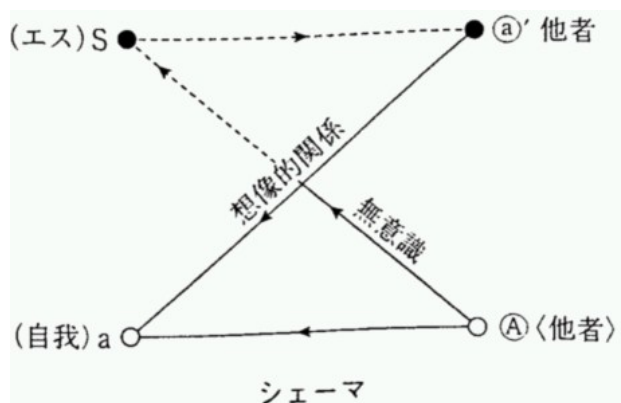
女性的形式は深層の大きな物語の審級を想定することをしない。そして、女性的形式は他者と想像的に同一化することで交わるが、それは自己の身体に関わる時も同じで、大他者ではなく、母との関係である前駆的大他者、或いは、個々の小他者との想像的同一化を経て、自身の身体のイメージを持つ。

身体とは、自己の一部でありながら、自己の所有物とも考えられる。ここで私は詳細な心身論に立ち入ることはしないが、身体を、他の対象と同じ方法を用いて理解することはできないということを指摘しておく。ボールペンやテレビという対象に比べ、身体はシニフィアンで止揚することが難しい。「何を持っているんですか」と尋ねられ、「ボールペンです」と答えることは比較的容易であるが、「どこが痛むんですか」と病院で尋ねられた時、自己の身体の部位を言葉により説明することに困難を感じた経験のある人は多いのではないだろうか。ここから、身体部位をシニフィアンにより止揚することはボールペンに比べて比較的難しいことがわかる。確かに、我々は身体を体重や筋力の測定を通してシニフィアンとして捉え

ようとする。しかし、身体は現実性の作用が強く⁵⁵シニフィアンの統御から漏れ出る部分が大きいと考えられ、よって、想像性が優勢な女性的形式のほうが男性的形式よりも度々身体に想像性を媒介させアクセスすることになる。身体を受容においては、ボールペンなどの他の対象を受容と比べ、シニフィアンよりイメージのほうが優勢であると考えられる。

男性的形式は、シニフィアンによって止揚する受容が優勢で、イメージによる受容の機能が弱いので、筋力測定や健康診断などの手続きにより身体をシニフィアン化して辛うじて身体にアクセスしようとする。しかし、「どこが痛むんですか」の例から身体はシニフィアン化が難しいことがわかったが、身体は不可能なものがそこに潜んでいることが他の対象よりも露呈しやすいと考えられる。一方、女性的形式は不可能なものを例外としての一者に隠すことはせず、常に享受している存在であると先に述べた。つまり、女性的形式は、不可能なものをイメージに媒介させることでそれに想像的に同一化することが得意である。即ち、想像性により、身体性＝現実性と近いものに関わる存在であると言いうる。よって、図8において、女性的形式は男性的形式よりも原点との距離が小さくなるように描いた。このことは女性的形式が男性的形式より現実界と関わり生きる存在であることを示したのである。

以上のことを踏まえることで、女性的形式の享樂の一つである大他者の享樂について一層クリアに論じることが可能になった。大他者の享樂は $S(A)$ で表せられるものであり、この時大他者は既に欠如したものである。ここでラカンの L 図を提示しておく。



(図10) L図

本稿の文脈では、ラカンが神経症と論じる「人間」は男性的形式を指しており、精神病と論じる存在は女性的形式を指していると解釈できると提起した。L図は主体 S が現実界には触れることができないことを示している。即ち主体は欠如し S となるということである。主体は自我 a と直接繋がることができず、主体は a' の媒介を通して想像的にしか自我 a に触れることができない。(=i(a)) 即ち、主体は a に触れていると思い込んでいるがそれは、自己がそう思い込んでいるだけであり、実際は a' に過ぎないのだ。しかし a と a' の間には断絶がある。大他者から想像的關係の軸への実線の矢印は大他者の無意識における審級が実は、主体が a をどのように受け取るべきかを指示していることを表し、 a と a' の断絶 (ズレ) を隠蔽する作用を持つと考えられる。だから、主体は a と繋がっていると思い込むのである。以上を本稿のタームで言い換えておくと、主体 S は現実界にある一人一人の実際の小他者と関わることはできず、常に大他者の審級を無意識に受け、自己の鏡像に過ぎない a' を現実的他者であると想定し受け止めているのである。そして、 a と a' は断絶しているにも関わらず a' は a を

反映しており、差異はないと思込ませるのが大他者の作用である。

このL図の構造はラカンが神経症を説明する時に用いた図であり、それを本稿では男性的形式と論じた。従って、男性的形式は大他者の審級を信じ込んでおり、享樂は対象 a に直接向かうファルス享樂となり、ファンタスム $S \diamond a$ を形成する。

一方、女性的形式の場合、大他者が機能していないわけではない、享樂はAにも向かう。そこで問題となるのは「〈他者〉を主体化すること、彼女自身のうちに〈他者〉を構成すること」⁵⁶となるのである。大他者の享樂はAに向かうので、女性的形式の主体は直接大他者にアクセスできるということになるが、女性的形式は全てを包摂する存在ではなかったため、一つ一つとしかアクセスすることはできない。一方大他者 A は超越論的一者とも言いうる存在であるのでここに矛盾が生じる。その為、大他者の享樂 $S(A)$ には斜線が引かれていると考えられる。男性的形式は不完全な大他者を完全なものであると想定するが、女性的形式はそれを不完全なまま受け止める手段を持っているということである。よって、この女性的形式における不完全な大他者は前駆的大他者と解釈できるかもしれない。また、フィンクが示唆するように⁵⁷、女性的形式は一人一人の存在であるため、 $S(A)$ はむしろ $S(a)$ と表されるべきなのかもしれない。

ラカンの用語の指し示す意味は時代によって変化するということは多くの識者に指摘されており、ラカンの大他者 A の意味するところも必ずしも一貫性があるとは言い難いと考えられる。A が大他者を示す場合もあるが、前駆的大他者を示す場合もある。この点に関してはさらに専門的な研究が必要になると考えられるので、この点に関しては今後の課題とし、これ以上深入りはしないが、前駆的大他者は現前—不在を繰り返す母であったので、母は欠如態であり、一回一回の関係となるという意味で、そのシニフィアンは $S(a)$ と表現できるかもしれないという可能性に留めておく。但し、 $S(a)$ で表現した a は対象としての a ではなく、原因としての(a)に近い意味である。このように考えると男性的形式が他者の声を大他者の声に回収して聞いているのに対し、女性的形式が大他者の審級を媒介させることなく、小他者と関わる a-a' の回路を持ち、主体がその想像関係にアクセスできる存在であるということがはっきりするように思われる。

同様に千葉はラカンの大他者はそれを本質的に述定するメタ言語、メタ大他者は存在せず、「Aの未規定性については、n個の他—性へと向かう」⁵⁸ というように解釈することができる。ここでいう n 個というのが、本稿でいう一つ一つの他者に対応させることができる。

但し、男性的形式も女性的形式も共に定型発達の心的構造を持っていると解釈されるので、5.1の最後で述べた通り、ラカンの〈母〉や〈父〉が原初的な事実として存在するわけではない。父や母の精神分析的な機能は定型発達者が欲望を置換し解釈したものであるとドゥルーズを参照することで考えることができる。しかし、定型発達者がこのような想定を行い欲望を抱くことは事実である。それが、脱コード化の流れの中での再コード化の手続きであり、本章における考察はその手続きの内部の構造であるということを明記しておく。

7.6 剰余について

東はシニフィアンとエクリチュールの間の空間に剰余が宿ると述べていた。本節ではもう少し具体的に剰余について言及する。剰余とは対象 a により位置付けられるものであり、現実界の残渣である。言い換えると、剰余とはイメージのシニフィアンによる止揚の流れから漏れ出た部分のことである。そして、図 4 を参照すると、剰余は現実界、想像界、象徴界の全てに関わる部分である痕跡としてのエクリチュールに由来すると考えられる。つまり、エクリチュールは不可能なものを含んでいるが、それがシニフィアンとなる時、不可能なものが剰余として切り離され欲望の原因となるのである。つまり、エクリチュールと対象 a は別物であり、エクリチュールはフェティッシュとなることはないが、残余物として分離された対象 a はフェティッシュとなるということである。

東は郵便＝誤配システムにおいて不可能なものは否定神学システムのように単数的一者に隠蔽することはなく、複数的に存在すると述べる。

だがより正確には、「不可能なもの」、非世界的存在そのものはどこにもないと言うべきである。ただし非世界的な効果は存在し、それは個々の情報をもつ速度のずれにより、つねに複数的に引き起こされている。⁵⁹

ここでの速度のずれを東は、個々のシニフィアンの伝達経路の差異（複数性）として理解しているが、本稿ではここまでの議論に則り東の理論を再構築する。

剰余は a と a' の間のズレから生じると考える。男性的形式がこのズレを象徴的に隠蔽するのに対して、女性的形式は想像的に小他者と一回一回関わる存在であるので、ズレとして認識されることはない⁶⁰。他者のエクリチュールを止揚の手続きの中で受容するか、そのままイメージとして受容するかという二つのモデルの間に剰余が宿る。言い換えると、この象徴性と想像性の差異の間に剰余は生じると考えられる。そして、この差異こそが脱コード化の流れである。

第 8 章 オタク論

8.1 東のオタク論批判

東はポストモダンにおいて、人間は欠乏—満足の回路に閉じると述べていたが、前節でみた通り、脱コード化の流れのなかにある心的構造だとしても、その流れにイメージとシニフィアンの次元は存在していた。これまでの議論を踏まえ東のオタク論に接続させる。東は、ポストモダンにおいて、人間は動物化すると述べていた。そして、千葉は動物化を女性への生成変化として捉えていた。では、ポストモダンでは人間は女性的形式へと移行するというように説明することができるのであろうか。ここで、東のオタク論を再度参照する。

オタクの行動原理は、ともに「シンボルの交換を中心とした深さを欠いたコミュニケーションと、限定された情報空間の内部でかろうじて維持される自己像」で特徴づけられ

る。⁶¹

シミュラークルの水準における「小さな物語への欲求」とデータベース水準における「大きな非物語への欲望」に駆動され、前者では動物化するが、後者では疑似的で形骸化した人間性を維持している。⁶²

東は、オタクにとってコミュニケーションは存在しているがそれは疑似的なものであると述べるのである。そして、他者とのコミュニケーションは空虚な情報（シンボル）の交換で満たされており、そこに感情的な心の動きは存在しない。感情的な心の動きは寧ろ、非社会的に身体的に、つまり、動物的に満たされている。つまり、東が解離と述べるのは、動物化の方向と疑似的な人間性の方向への解離である。上の引用から明らかなように、前者の方向で、シミュラークルの次元の小さな物語と接続し、後者の方向で、疑似的コミュニケーションを行うことと、大きな非物語への欲望が存在することを説明する。本稿で着目するのは、東が後者に位置付けた二つの要素は実は別の次元に存在するのではないかということだ。

そのように考えると、東が二項に解離すると述べたことを、本稿では三項に解離していると言い換えることが可能になる。即ち、大きな非物語への欲望を男性的形式として、シミュラークルへの没入を女性的形式として、疑似的コミュニケーションと東の動物化の方向であるシミュラークルからの快—不快の感情のイメージを自閉症的な性質を持つ形式として分類することが可能になるのではないかという示唆を以下で行う。このことを踏まえ以下で事例を出しながら示していく。

8.2 自閉症的な性質を持つ形式の次元

まずは、東のいう動物化の次元、即ち、小さな物語への欲求である。先に言及した通り、東の動物化の意味するところは物質的アディクションの次元であった。しかし、物質的アディクションは人間においてありえない仮定の世界であった。そこで、図7を参照し、物質的アディクションに近接する自閉症的な性質を持つ形式が東のいう動物に当たると考えてみる。自閉症的な性質を持つ形式は言語使用における S_2 の横滑り即ち、キャロル的な言語使用を行う。この言語は対象 a としての声が剥ぎ取られており、皮肉や比喩などの字義通り以上の意味が存在しない。

オタク達の疑似的なコミュニケーションは情報共有に留まっていると東は述べた。一般にオタク達の会話は「〇〇さんは今期何を観てるの？」から始まり、相手がどのジャンルのオタクに属しているかを探ることが多い。そして、オタク達は聴き下手であるといわれる。つまり、映画や俳優の話をされたとしても、「三次元にあんまり興味ないですね」としか答えられない。オタク達は自分の興味のある内容について、無限にその情報をマシンガンのように打ち合うという会話しかできない。言い換えると、相手の空想を空想することで、相手とともに積み立てていくような会話ができないのだ。定型発達の話者の場合、会話を重ねていくうちに、その場のコンテクストがだんだんわかってくと述べた。しかし、相手の空想を空想するという能力が弱いオタク達は、会話を始める前に相手がどの種類のオタクに属してお

り、どのくらいの情報を持っているかを「〇〇さんは今期何を観てるの？」と問うことで、殆ど直接的に尋ねる。もし、自分と趣味が一致したならば、そこで情報交換が始まるが、一致しなかったならばそれ以上の会話は存在しない。東は「有益な情報が得られるかぎりでは社交性を十分に発揮するのだが、同時に、そのコミュニケーションから離れる自由もまたつねに留保している」⁶³と述べている。

また、小さな物語に対する欲求の一部も自閉症的な性質から説明される。オタク達は、深層に結び付けることなくシミュラークルを快—不快のイメージとして捉える。そのため、自分にとって快でないシミュラークルには興味がない。しかし、オタクは自閉症的な性質を持つ形式とイコールではない。つまり、オタクは快の感情を惹起するものに対して、享樂を求める。それが次節で検討する女性的形式の享樂のあり方である。言い換えると、自閉症的性質により快を惹起し、その後イメージの次元から享樂を享受するのである。

8.3 女性的形式の次元

次に、東が動物化していると述べた小さな物語への欲望についてである。東は動物と述べるが、実はそれは女性的形式への生成変化であると千葉は指摘していた。そこで、小さな物語への欲求は女性的形式から分析可能であるということを示す。ポストモダンに生きるオタク達は深層に大きな物語を持たないので、表層におけるストーリーに素直に感動する。この素直にというのは、いちいち大きな物語に接続し、イメージをシニフィアンに止揚する手続きを踏まずに、a-a'の間の想像的關係にアクセスしているということを示す。例えば、移行期に放映された『機動戦士ガンダム』を分析的に鑑賞すればすぐにわかることであるが、劇中における戦争の設定は第二次世界大戦と旧日本軍をモチーフにしたような部分が存在する。そして、鑑賞者はストーリーを楽しむにあたって、都度先の戦争と照らしながら楽しむことができる。そこでは、大きな物語が機能しており、我々の解釈を（一義的ではないとしても）決定している。つまり、物語の鑑賞と分析が一緒に行われる。一方、ポストモダンに放映された『新世紀エヴァンゲリオン』は純粋なシミュラークルとして描かれており、『機動戦士ガンダム』よりも深層の物語（例えば作品外における歴史や文化などの参照）が少ない。以上から、ポストモダンのオタク達は表層の小さな物語を大きな物語にアクセスすることなく、盲目的に物語を鑑賞していると考えられる。子供向けの戦隊ものなどを素直に楽しむことができるオタク達も同様に説明されるのである。そして、別の次元である、男性的形式の次元で作品を象徴的に分析する。

これに対して、60年安保闘争における学生運動を参照すれば、活動家たちは自身の行動の背後には常に大きな物語の審級であるイデオロギーがあると信じ込んでいる超コード化のシステムである。しかし、70年代以降の学生運動になると移行期の特徴が現れてくる。つまり、各人の中でのイデオロギーの解釈の相違が前景化し学生運動はセクト化する。ポストモダンにおいては、小さな物語は相対化され絶対的な物語はないと考えるようになるのであったが、移行期においては各セクトが其々のイデオロギーを否定神学的システムを通して絶対的なものだと思込む。そして、内ゲバが生じたと考えられる⁶⁴。つまり、ここに男性的形式を読み取ることが可能である⁶⁵。

しかし、深層に触れることなく表層の物語を消費する女性的形式を持つオタク達は、同じオタクという共同体に属しているとしても、物語を他者と全く同じように楽しむことはないということを理解しており、些細な解釈の違いには無頓着であると考えられる。

また、オタク達は小さな物語を恣意的に享受していると考えられる。つまり、大きな物語を参照することなく、自分の受け取りたいように物語をイメージし受け取っていると考えられるのである。そうすることで、自己と物語の間の関係を想像的に捉え、あるいは、物語中の人物と想像的に同一化し、表層の物語を楽しむのである。

斎藤は男性向けのサブカルチャー作品と女性向けのサブカルチャー作品を比較し、前者では男性オタクがキャラクターに同一化しやすいように男性のキャラクターの描写が極端に少ないが、後者では女性のキャラクターが積極的に描かれている。つまり、男性的形式はキャラクターが描かれていると想像的に同一化することに困難を覚えるのに対して、女性的形式はキャラクターが描かれていたとしても想像性が強いため、想像的に同一化することが比較的容易であるのである⁶⁶。このように、男性オタクと女性オタクの差異は存在するが、オタクは作中の人物に想像的に同一化することで享樂を享受しているのである。

8.4 男性的形式の次元

オタクはキャラクターをデータベースにより萌え要素(シニフィアン)に分割し分析する。つまり、オタクにとって、シミュラクルは萌え要素により完全に分析することができると思う。この萌え要素を言語と言い換えると、そのまま男性的形式と同じ構造を持つことがわかる。この次元に存在するオタクの極限としてマニアが挙げられる。マニアとはあるものを蒐集する人のことで、鉄道模型やフィギアなどを蒐集する。この場合、現実(虚構の場合もある)に存在する蒐集すべきものは有限個である。そして、その有限個を全て自分のものにしようとする。鉄道模型を例に出すと、鉄道模型の世界の全ては鉄道模型を全て集めることで把握されるのであり、マニアは把握されると信じている。勿論、それは静的な世界ではない。新しい列車が登場すると、模型の世界にも影響を与え、鉄道模型の世界は動的に変化していく。これは、萌え要素の世界も同じであり、萌え要素のコードも常に変化していくものである。

近代以降に存在する蒐集癖を持つマニアの行動と、ポストモダンにおけるオタクのマニア的行動には差異がある。前者が純粋に所有を目的とし世界を把握しようとするのに対して、後者は所有のその先も重視する。後者は蒐集したのものにより快の感情が惹起され、そしてイメージにより想像的に同一化するという手続きを持つ。即ち、蒐集だけが目的ではなく、目的はその先のオタク的行動様式にもあると考えられるのである。近代的マニアは男性的形式の心的構造を持つので、鉄道模型をシニフィアンとして捉え、世界を把握しようとするのに対して、オタク的マニアはフィギアを全て集めたからと言って世界はそうでなかったかもしれない可能性を孕んでいることに自覚的であり、そもそも世界の全体を想定することができないことを知っている。つまりオタク的マニアにとって蒐集すべきものの全体集合は仮想に過ぎないことを知っている。以上から、オタクの男性的形式の様式は既に女性的な契機を孕んでいると解釈される。しかし、オタクにとって象徴性と想像性は解離しているので、盲目

的な蒐集と想像性による同一化は別々に行われる。

8.5 キャラクター

斎藤はキャラクターは想像的次元に存在していると述べる⁶⁷。キャラクターは人間の想像性によって生み出され、人間の想像性によって解釈されるのである。本稿では何度も女性的形式の会話は情報を伝達することよりもむしろ、会話における繋がり、他者との想像的關係性というものを重視するものであり、内容の重要度は低いということを述べてきた。ここでは、オタクにとって、他者はアニメや漫画であり、キャラクターだと考える。

しかし、アニメや漫画、キャラクターは想像性からだけで成り立つわけではないと考える。そこには象徴性と現実性が入り込んでいるのだ。そして、想像性、象徴性、現実性を別々に享受するあり方が、オタク的あり方であり、本章における三項への解離にも対応するはずである。

キャラクターはオタクにとって、萌え要素により分割し分析することが可能なものであると考えられていた。しかし、斎藤の言うようにキャラクターは要素の順列組み合わせのみから決定するわけではなく、要素に還元され得ない剰余の部分が存在している。しかし、オタクは萌え要素の組み合わせでのみ決定すると思込んでいる。即ち、ここに男性的形式の世界認識の手続きが潜んでいると考えられる。つまり、オタクはシミュラクルの純粹にイメージの次元にあるものを萌え要素というシニフィアンで止揚し不可能なものを超越論的な一者に閉じ込め隠蔽する男性的手続きを踏む。

アニメや漫画において、キャラクターの顔、瞳は無数に描かれているが、視聴者、読者はその変化の中に同一性を見出す。では、どのようにしてキャラクターの同一性を認識しているのか。それは、欲望の原因としての対象 a とでも言うものであり、現実界の残渣である、視線や眼差しなどである。我々の顔や視線、眼差しはヘラクレイトスが「同じ川には二度入れない」と述べたように、常に変化し続けるものであるが、その中に同一性のコンテキストが含まれている為、特に定型発達者にとって、今日の母親＝昨日の母親という等式が素朴に成り立つと思込込む。この対象 a は萌え要素（シニフィアン）へと止揚する際に残渣となるものであり、触れることの不可能なものである。これが、シニフィアンの連鎖が織り成す象徴界を内側から破壊する。特に女性的形式は対象 a に想像的に関わると先述した。本節の文脈で言い換えると、同一性は人間の想像性により保証されている。つまり、同一性のコンテキストを読み取るのが想像性の作用である。

ここまで、シニフィアンとしての萌え要素というものを分析してきたが、萌え要素にはもう一つの側面、即ち、エクリチュールとしての側面が存在した。エクリチュールは個々のコンテキストに移植されて（つまり、シニフィアンへの裏打ち構造となり）初めて意味を持つものであった。エクリチュールとしての萌え要素はキャラクターを構築する際のデータベース（アーカイブ、セミオティック）としてあるが、シニフィアンとしての萌え要素のように言語による分節が行われているわけではない。つまり、エクリチュールとしての萌え要素（アーカイブ）には不可能なものが内在しており、対象 a は未だ分離されていない。

ここで、5.1 で提起しておいた問題を振り返る。東は自己の理論を想像界における理論である

と考えている。斎藤が無意識の欲動は象徴界に由来する機能であり、ポストモダンにおいても象徴界は重要なポジションを持つと言うのに対し、東は「象徴界」というイメージが求められ有効だった時代が終わったのではないか⁶⁸と述べ、ポストモダンではデータベースをイメージするようになると考える⁶⁹。しかし、東の描く動物化の理論は先に述べた通り、快—不快の回路に閉じるものであった。言い換えると、東のポストモダン論は快—不快の感情をイメージにより受け取るもので、本稿ではその心的構造を自閉症的な性質を持つ形式であると考えた。つまり、東のいう想像性は鏡像段階より前の想像性であり、物質的アディクションの次元に近い自閉症的な性質を持つ形式の原—想像界とでも言うものである。本稿の批判は、鏡像段階後に形成される想像性の次元が東には不足しているというものである。

8.6 都市とオタク

本節では、ここまでの議論を総括する為に、都市の景観に言及する。森川嘉一郎は都市景観の変化について以下のように述べる。

第一フェーズの男性的人格、第二フェーズの女性的人格に代わりにここでは〈未来〉を喪失した男性、あるいはオタクという第三のジェンダーが続べている。⁷⁰

森川の議論は表4の通り。

第一フェーズ (60年代的)	第二フェーズ (バブル以降)	第三フェーズ (97年以降)
官主導の都市 (西新宿)	民主導の都市 (お台場、ディズニーランド)	個主導の都市 (秋葉原)
男性的人格 (未来志向)	女性的人格 (虚構に留まる)	オタク (自分の趣味にこもる)

(表4)

第二フェーズを森川は女性的人格と述べたが、本稿の文脈から捉えなおす。第二フェーズは脱コード化の流れの中における、再コード化の手続きであると解釈できる。ディズニーランドでは、客を徹底的にその虚構世界にのめり込ませようとする作用が働いている。しかし、誰しも、ディズニーランドが虚構世界であることは知っており、ディズニーの世界観への冷静な分析を行う。つまり、第二フェーズはオタクの解離的なアニメの鑑賞と同じ構造を持っており、第二フェーズの人格は女性的形式的な没入と、ポストモダンにおける男性的形式的な冷静さを備えていると考えられる。

そして、第三フェーズの人格を森川は「客体に対して防衛的で、それを自分たちの趣味に染めて同化させようとするような人格が、そこに介在している」⁷¹と述べる。つまり、自閉症的な性質を持つ形式が縁を作り、自己の内側でララング的な享楽を得て、外界の自己の興味のないものには関わらないようなあり方と似た構造を第三フェーズは持っている。但し、第三フェーズの人格は自閉症的な性質を持つ形式と異なり、自己の縁を現実の空間に作る。

第9章 最後に

本稿の狙いは東の理論を概観しなおすことで東に不足している想像性という概念を提起し、東の理論を想像性という観点から再構築することであった。ここまでの議論により、想像性はポストモダンにおいても失われていないという点が明らかになった。即ち、東はポストモダンでは（東の意味で）動物化し、快—不快とそのイメージ閉じると考えたが、それは事態の一面しか捉えていない。確かに、ポストモダンにおいて快—不快の回路は人間の要素の一つではあるが、他の要素も存在する。東がポストモダンにおいては否定されると考えていた否定神学システムも、男性的形式の思い込みとして残り続ける。この思い込みを成り立たせるものが東に不足する想像性の感覚である。

東はポストモダンにおいて人間は動物化の方向と疑似的な人間性の方向に解離すると述べるが、そうするとポストモダンの人間性というものを構築することができなくなってしまう。即ち、東の説はコジェーブと同じく近代を軸にしてポストモダンの状況を分析しており、ポスト歴史には世界を産出するものとしての人間はいないということになり、近代以前のほうが良かったという単純な懐古主義に陥る可能性を孕む。本稿におけるオタクの分析を通して、ポストモダンの人間も近代的な人間と同様に象徴性、想像性、現実性の三つの要素を持っていることが明らかになった。相違は、その三つを解離的に享受しているということである。近代的な人間は想像界と現実界を象徴界により統御している男性的形式であると考えられるが、ポストモダンの人間はその統御が弱まり象徴性、想像性、現実性を絶えず連結、解離の運動の中に置き生きていると考えられる。本稿ではこれがポストモダンにおける人間性であると結論する。東はこの解離現象の一面を強調し、動物化していると主張していると考え得る。

註

¹ 東（1998）285頁

² 東（1998）316頁

³ 東（1998）318頁

⁴ 東（1998）320, 321頁

⁵ 本論文では東（2007）に所収されているものを利用する。初出は『表象のディスクール1：表象—構造と出来事』、東京大学出版会、2000

⁶ ハイデガー（2011）第32節参照

⁷ ここには、エクリチュールとシニフィアンの関係性即ち散種の構造が見られる。

⁸ ハイデガーは『存在と時間』の中で先構造について、先持(Vorhabe)、先視(Vor-sicht)、先取(Vorgriff)という下位分類をもうけ分析を進める。

⁹ ここでの話は語 Sprache と同じ意味である。

¹⁰ 東（2007）155頁

¹¹ 東（2007）161頁

¹² このツリーモデルは『存在論的・郵便的』の文脈でいうと形而上学システムとなると東は述べている。

-
- ¹³ 東 (2001) 99 頁
- ¹⁴ コジューブ (1987) 244 頁
- ¹⁵ コジューブ (1987) 14 頁
- ¹⁶ 萌え要素とは東が提案する概念であり、キャラクターなどが持つ要素である。例えば猫耳やメイド服などのことである。東によると、キャラクターは萌え要素に分割され分析される。
- ¹⁷ 東 (2001) 127 頁
- ¹⁸ 東 (2001) 129 頁
- ¹⁹ 東 (2001) は具体的には『ナデシコ』のホシノ・ルリ、『エヴァンゲリオン』の綾波レイ、『零』の月島瑠璃子、『アキハバラ電脳組』の大鳥居つばめという四つのキャラクターは設定やデザインの点で多くの共通点を持っていると考える。
- ²⁰ 仲正 (2018) 301 頁
- ²¹ 東 (2001) は高度成長期の日本では、国家が主導となり、疑似的にツリーモデルが維持されたと述べている。これが、脱コードを覆い隠す再コード化である。
- ²² ドゥルーズ・ガタリ (2006) 下巻 102 頁
- ²³ 東 (2003) 169 頁
- ²⁴ 田中 (1997) 25 頁
- ²⁵ 東 (1998) 121 頁
- ²⁶ 千葉 (2009) 204 頁
- ²⁷ 千葉 (2009) 206 頁
- ²⁸ 東 (2001) は註の中で、女性のやおいものを好むオタク達は、それを萌え要素としてではなく、現実におけるセクシュアリティとして受け止めている人がいることを指摘している。東はこの女性オタクについては自身の理論では論じ切れないと考えている。
- ²⁹ 東 (2003) 184 頁
- ³⁰ 千葉 (2009) 209 頁
- ³¹ 本稿における、シニフィアンの秩序、象徴界としての象徴と混同される恐れがあるため、ヘーゲルの記号との対比における「象徴」には鉤括弧を付ける。
- ³² この定型発達と自閉症の捉え方は二項対立図式ではない。他者のイメージを抱く力というのはグラデーションをなしていると考えられるが、本稿では、そのグラデーションの両極端のみを扱い、自閉症、定型発達と呼称する。したがって、本稿で言う自閉症が必ずしも現に生きる自閉症患者に当てはまるとは限らないし、症例によってはまったく的外れな見解をのべることになるかもしれない。私の本稿での目的は自閉症者を分析することではないので、精神構造の二つの極端な在り方として、つまり、モデルとして扱う。
- ³³ 野尻 (2018) 119 頁
- ³⁴ 野尻 (2018) 119 頁
- ³⁵ 松本 (2015) 332, 333 頁
- ³⁶ 本章では、否定神学と男性的形式を結びつけて考える。否定神学は脱コード化の流れの中における再コード化に対応していると第 5 章では述べた。しかし、超コード化つまり、近代的な新構造については本稿ではあまり紙幅を割いていない。ここで、誤解を避けるために、述べるが、近代とは大きな物語の機能している男性的なあり方である。否定神学では大きな物語は否定的にしか語られないのに対して、近代では大きな物語は実際に存在している。つまり、この近代的あり方のほうこそが、男性的な形式を持つと言いうる。そして、否定神学的なあり方は想像性に由来する男性的形式である。ポストモダンにおける、再コード化としての男性的形式は疑似的なものに過ぎない。本稿で、単に男性的形式と述べる時は再コード化の流れにおける男性的形式を指す。
- ³⁷ 松本 (2015) 334 頁
- ³⁸ 千葉 (2009) 205 頁
- ³⁹ 松本 (2017) 144 頁
- ⁴⁰ 松本 (2019) 298 頁など
- ⁴¹ 相川 (2017) 参照

-
- ⁴² ブルース・フィンク（2013）において、l'Autre（本稿では大他者と表現している）は〈他者〉と表現されている。
- ⁴³ フィンク（2013）94 頁
- ⁴⁴ 松本（2015）242 頁
- ⁴⁵ クリステヴァ（1991）16 頁
- ⁴⁶ クリステヴァ（1991）63 頁
- ⁴⁷ 松本（2017）149, 150 頁
- ⁴⁸ 松本（2019a）53 頁
- ⁴⁹ エクリチュールを深層として捉える東は批判されるべきであるかもしれないことを推測した。本稿では、現実性、想像性、象徴性は同じ位相にあり、どれか一つが欠けるとバラバラになるボロメオの輪として提起したが、人間の心的構造を解釈する際にエクリチュールは寧ろ表層として解釈することが可能であるかもしれない。つまり、表層にイメージとエクリチュールがあり（但し、イメージとエクリチュールは別の次元に存在している）、深層にシニフィアンの構造が存在すると解釈できるかもしれない。しかし、これを証明するには更なる専門的研究が必要であるので本稿では深入りしないことにした。
- ⁵⁰ フィンク（2013）170 頁
- ⁵¹ フィンク（2013）165 頁
- ⁵² 斎藤（2009）209 頁
- ⁵³ 斎藤（2009）216 頁
- ⁵⁴ 斎藤（2009）223 頁
- ⁵⁵ 身体性と現実性は同値ではない。現実性の強いものは身体だけではない。
- ⁵⁶ フィンク（2013）171 頁
- ⁵⁷ フィンクも $S(A)$ は大他者の欠如を表すものから、最初の喪失を指し示すものへと意味が変化しており、後者は $S(a)$ と表現し得るものであると示唆している。ここでいう、最初の喪失とは母子一体の喪失のことである。
- ⁵⁸ 千葉（2017）209 頁の註
- ⁵⁹ 東（1998）180 頁
- ⁶⁰ この理論は女性的形式にとって不可能なものは不可能なものではないというロジックと同じである。
- ⁶¹ 東（2001）133 頁
- ⁶² 東（2001）140 頁
- ⁶³ 東（2001）137 頁
- ⁶⁴ セクトの考え方に共鳴する人のことをシンパと呼ぶことからわかるように、各セクトは想像的に超越論的大きな物語を構想する。これは、想像的にオイディプスを形成しているに過ぎないと考えたドゥルーズの理論と対応している。
- ⁶⁵ 学生運動には本稿で論じたよりもっと多くの要素が絡んでいることは否定できない。例えば 70 年以降はカルト的な要素があったと考え得るし、モテる為に活動家になるというようなファッション的な要素もあったと考え得る。しかし、学生運動の詳しい歴史的背景や各セクトのイデオロギーに基づく分析は明らかに本稿の射程を超えている。
- ⁶⁶ 斎藤（2009）173, 174 頁
- ⁶⁷ 斎藤（2007）207 頁
- ⁶⁸ 東（2003）169 頁
- ⁶⁹ 本稿ではポストモダンにおいてこそ再コード化の手続きとして象徴性をイメージにより想定すると考える。
- ⁷⁰ 森川（2003）251 頁
- ⁷¹ 森川（2003）250 頁

参考文献

- 相川翼、2017、『自閉症の哲学—構想力と自閉症からみた「私」の成立』 花伝社.
- 浅田彰、1983、『構造と力 記号論を超えて』 勁草書房.
- 東浩紀、1998、『存在論的、郵便的 ジャック・デリダについて』 新潮社.
- 東浩紀、2001、『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』 講談社.
- 東浩紀、2011、『郵便的不安たちβ 東浩紀アーカイブ1』 河出書房.
- 東浩紀、2007、『文学環境論集 東浩紀コレクションL』 講談社.
- アレクサンドル・コジューブ、上妻精・今野雅方訳、1987、『ヘーゲル読解入門』 国文社.
- 柄谷光人、1988、『日本近代文学の起源』 講談社.
- 斎藤環、2006、『戦闘美少女の精神分析』 筑摩書房.
- 斎藤環、2009、『関係する女 所有する男』 講談社.
- 斎藤環、2011、『キャラクター精神分析 マンガ・文学・日本人』 筑摩書房.
- 斎藤環、2012、『世界が土曜の夜の夢なら ヤンキーと精神分析』 角川書店.
- ジャック・デリダ、足立和浩訳、1972、『根源の彼方に—グラマトロジーについて』 現代思潮社.
- ジャック・ラカン、藤田博史・片山文保訳、2019、『アンコール』 講談社.
- ジュディス・バトラー、竹村和子訳、1999、『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 青土社.
- ジュリア・クリステヴァ、原田邦夫訳、1991、『詩的言語の革命』 勁草書房.
- ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ、宇野邦一訳、2006、『アンチ・オイディプス 資本主義と分裂症』 河出書房.
- 新宮一成、1995、『ラカンの精神分析』 講談社.
- ソール・クリプキ、八木沢敬・野家啓一訳、1985、『名指しと必然性 様相の形而上学と心身問題』 産業図書.
- 田中純、1997、「ポスト郵便都市」 『10+1』 第10号 INAX 出版.
- 千葉雅也、2009、「トランスアディクション 動物—性の生成変化」 『現代思想』37巻8号、青土社 202-215.
- 千葉雅也、2017、『動きすぎてはいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』 河出書房.
- 中正昌樹、2016、『〈ジャック・デリダ〉入門講義』 作品社.
- 中正昌樹、2018、『ドゥルーズ+ガタリ 〈アンチ・オイディプス〉入門講義』 作品社.
- 野尻英一、2018、「未来の記憶—哲学の起源とヘーゲルの構想力についての断章—」 那須政玄・野尻英一編『哲学の戦場』 行人社 1-142.
- 野尻英一、2019、「哲学—「人間」を考え続けた二五〇〇年の歴史が変わる」 野尻英一・高瀬堅吉・松本卓也編『〈自閉症学〉のすすめ』 ミネルヴァ書房 61-97.
- フィリップ・ジュリアン、向井雅明訳、『ラカン、フロイトへの回帰—ラカン入門』 誠信書房.
- ブルース・フィンク、村上靖彦・小倉拓也・塩飽耕規・渋谷亮訳、2013、『後期ラカン入門』 ラ

カンの主体について』 人文書院.

檜垣達也、2002-03、「「差異」の差異」 大阪大学大学院人間科学研究科紀要 28 巻 82-93.

松本卓也、2015、『人はみな妄想する ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』 青土社.

松本卓也、2017、「ラカン派精神分析による自閉症論」 上尾真道・牧瀬英幹編『発達障害の時代とラカン派精神分析—〈開かれ〉としての自閉をめぐって』 晃洋書房 130-162.

松本卓也、2019a、「精神病理学/精神分析 世界体験を通して理解する自閉症」 野尻英一・高瀬堅吉・松本卓也編『〈自閉症学〉のすすめ』 ミネルヴァ書房 29-55.

松本卓也、2019b、『創造と狂気の歴史 プラトンからドゥルーズまで』 講談社.

マルティン・ハイデガー、細谷貞雄訳、2011、『存在と時間』 筑摩書房.

森川嘉一郎、2003、『趣都の誕生 萌える都市アキハバラ』 幻冬舎.

守中高明、2016、『ジャック・デリダと精神分析—耳・秘密・灰そして主権』 岩波書店.

向井雅明、2016、『ラカン入門』 筑摩書房.

東浩紀・永山薫・斎藤環・伊藤剛・竹熊健太郎・小谷真理、2003『網状言論F改 ポストモダン・オタク・セクシュアリティ』 青土社.